

2021 年度北京研修報告集

東京大学 & 中国人民大学

日中2世代生活誌

ゼンショー東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム (LAP)

2021 年度北京研修報告集

東京大学 & 中国人民大学

日中2世代生活誌

ゼンショー東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム（LAP）

2021 年度北京研修——日中 Z 世代生活誌

2014 年から毎年実施している北京研修は、東京大学の学生団が北京を一週間訪問し、北京のさまざまな部署（大学、マスメディア、政府機関、民間企業等）を訪れて北京の学生や社会人と交流するプログラムである。2021 年度の研修は、昨年度同様、コロナ禍のため、学生派遣を断念したが、デジタル・ネイティブ世代ならではの SNS 感覚で、個人体験を中心に意見交換や相互取材を行うことによって、同世代の中国人を通して、21 世紀以来の中国社会への理解を深めると同時に、自分を省みて日本の社会や文化を再認識することが目標として定められた。

「日中 Z 世代生活誌」をメインテーマに、2021 年 11 月 4 日から 26 日にかけて、6 名の東京大学生と 7 名の中国人民大学生のチームワークによって、各チームの共通関心に基づいた生活誌（社会史を背景にした個人史）ファイルが制作され、最終会合では、個性あふれる 5 つの映像系作品が発表されました。そして、映像に収めきれなかった交流の細部、研修で語りきれなかった様々な思いが、この報告集では綴られています。

本冊子は、この三週間のオンライン研修活動の全記録であり、参加生一人一人による随想集でもあります。

近いようで遠い、遠いようで近い存在である日本と中国。パソコン / スマホの向こう側にいる一人一人は、「中国人」であり「日本人」であり、名前も顔も性格も違うかけがえない個人であることを参加生たちは認識したのではないのでしょうか。

2022 年 3 月

目次

研修日程表	4
-------	---

01 一人っ子と兄弟姉妹

【研修記事】	
小春日和の三人とも	森川力斗 6
中日（非）独生子女成长体验问题研讨报告	于孙腾 周诗颖 12
【研修感想】	
生活という共通言語	森川力斗 17
九州何处远，万里若乘空	于孙腾 18
常棣之华——二孩家庭的得失思考	周诗颖 20

02 私と新世紀エヴァンゲリオン

【研修記事】	
我和新世纪福音战士交流报告	高山晖启 赵黛霖 23
【研修感想】	
1か月の学び	高山晖啓 31
跨越不同，以“二次元”的方式	赵黛霖 32

03 日常の共有

G1	
【研修記事】	
ほーちゃんとの交流	松村実紗 34
Someday we will laugh all night about our hardest time	陈方媛 37
【研修感想】	
中国留学を夢見て	松村実紗 39
关于 HOMIE 组合的二三事	陈方媛 40
G2	
【研修記事】	
ススキのように	石川禎子 41
“两京一假日”——个性又共性的一天	王友莲 44
“两京一假日”的提出与实现—深入生活，寻找异同	刘畅 46
【研修感想】	
自己定義	石川禎子 48
两京一假日——学习之旅	王友莲 49
由点到面：别开生面的线上交流经历	刘畅 50

04 冬日祭

【研修記事】	
オンライン交流による日常時間の共有	阿部祥拓 53
冬日来信	孙文 56
【研修感想】	
オンライン交流の良さと限界に触れて	阿部祥拓 58
望向他者的想象	孙文 59

参加者一覧	60
-------	----

研修日程表

11月4日（木） まで	Plog/Vlog 作品で「自己紹介」 ・ポイントを絞ること（例：コロナで明け暮れた一年、私の読書 / ゲーム遍歴、外国語「を／で」勉強すること、東大生／人民大生の日常などなど） ・形式自由（動画、漫画、ppt）
11月4日（木） 18:00~	研修説明【全体会合※¹】 自己紹介「作品」の展示と質疑応答を通して、共通の問題関心を明確にし、チームを組む
11月5日（金） ～ 11月10日（水）	計画段階【チームワーク※²】 チーム内の討議を通して、各自の生活誌（社会史を背景にした個人史）ファイルの作成計画を作成
11月10日（水） 18:00~	中間報告【全体会合※¹】 ・チーム毎の活動計画報告 ・全体討議を通して、方向性や実施方法などを調整
11月10日（水） ～ 11月26日	制作段階【チームワーク※²】 ・資料調査やインタビューなどを踏まえて、各自の生活誌ファイルを作成 ・進捗報告（11月18日～11月19日） ・修正、制作を繰り返し、最終発表に向けて仕上げる
11月26日（金） 18:00~	最終発表会【全体会合※¹】
12月3日（金）	課題提出

※ 1 全体会合：ZOOM によるオンライン開催

※ 2 チームワーク：連絡手段、頻度、作業分担などメンバーと相談して決める。

討論過程を録画などで記録すること。

01. 一人っ子と兄弟姉妹

【研修記事】

小春日和の三人とも 森川力斗 6

中日（非）独生子女成长体验问题研讨报告 于孙腾 周诗颖 12

【研修感想】

生活という共通言語 森川力斗 17

九州何处远，万里若乘空 于孙腾 18

常棣之华——二孩家庭的得失思考 周诗颖 20

小春日和の三人とも

構成・森川力斗

「生活誌」を作ることの意義

“それは、様々な文化や価値観が入り乱れ、自らの存在理由を見失いがちな現代において、「自分は何者で、これからどこに向かっていくのか考える」という意義です”

東京大学教養学部理科一類の森川力斗と申します。この文章では、僕が2021年11月に約三週間かけて参加した北京研修を、交流時の実際の会話を中心に振り返りたいと思います。

今回の研修では主に于孫騰、周詩穎という二人の中国人民大学の学生と交流し、二人と共同で「日中生活誌」の発表を行いました。

研修の前の夏休みの期間、毎日中国語の学習に専念していた僕は、その成果を生かすべく大学で実際に中国人と交流できる機会を探していました。研修を見つけたときは、自分の中国語が上級者ではないことを自覚しながらも、挑戦のつもりですぐに応募しました。その後無事選考に合格し、もともと猛勉強していた中国語へのモチベーションは更に高まり、第一回交流会に向けてひたすら中国語の学習に励みました。

そして、11月4日に第一回交流会を迎えました。実は、そこで指導員の方から交流の主題の説明をいただいたとき、少し戸惑ってしまいました。なぜなら、その主題が「生活誌」だったからです。

というのも、研修の応募書類にも書いたのですが、僕ら中国への主な関心は、日本との文化的な繋がりと、「超大

国である中国が日本とともに、どのようにアジアの経済的、平和的な発展に寄与していくか」ということにありました。研修では、中国の超一流の生徒とそのようなスケールの大きい話を展開することを想定していましたから、思ったより深い話ができないのかな、と少し拍子抜けしてしまいました。

しかしながら、個性の強い参加者たちの自己紹介の時間は楽しいものになりました。オンライン開催であったために、自分から移動して直接話しかけに行くことは叶いませんでしたが、人民大学のみんなから発せられる雰囲気は一人一人全く違って、多様化した現代中国の空気感が感じられました。

そして、共同で発表する日中の学生のグループを作る際は、日本に19年間染まってきた価値観を根本から壊してくれるような、刺激的な人と交流したいと思い、自己紹介のパートで一番インスピレーションを感じた孫騰と組むことを申し出ました。そして、もともと孫騰と組んでいた詩穎と三人のグループができました。第一回交流会が終わってから僕たちは早速、WeChatを使って、発表の内容について検討し始めました。

孫騰「出来れば私たちにできないものを作りたい。例えば私たちの目に映る相手の国とか国際社会とか。力斗さん、遠慮なく案を出してください。」

力斗「国際社会という点では、僕は大量生産大量消費をもたらす環境破壊によって人類の生存の危機に瀕するような『グローバル資本主義の矛盾』に興味があるよ。他には、現代社会の対人関係における目的論的な捉え方や、儒教の文化が残る東アジア特有の『有害な男らしさ』にも興味がある！」

孫騰「興味深い観点ですね！人間関係というテーマは生活史という概念にも合致している。」

詩穎「私もこの話題は取り上げる価値があると思う。」

力斗「中国だと、一人っ子であることによる家族からの重圧の問題なんかがあるのかな？」

孫騰「一人っ子の問題は確かに特殊な問題だね。私自身一人っ子です。どうやら既に基本的なテーマは『他者との交際』の方向性に決まったようですね。」

詩穎「私は考えたい問題が一つある。コロナのパンデミックが起こってから皆がインターネットでの交流に頼っていて、実際に会ってコミュニケーションすることがどんどん減ってきた。だから、そんな時代において、どうやって交流を広げるか、どんなコミュニケーションの方式だったら互いに親近感を感じられるかという疑問がある。」

力斗「詩穎の提起した問題も発表に取り入れると、この議論の完成度が高くなると思う。内容を第一章『現実起こっている問題の描写』、第二章『問題の原因の分析』、第三章『問題を解決、防止する方法』の三つに分けるのはどうだろう？」

孫騰「いいね!ありがとう!」

こうして、11月10日の中間発表会では人間関係について考察した内容を発表することになりました。

しかし、最初に発表するチームであったことに加えて、途中パソコンの故障があり、相当に緊張してしまった僕は、中国語をあまり上手く話せませんでした。流暢に話そうとすればするほど、自分の発音に集中してしまい、相手に伝わる話し方が出来なくなりました。視線は聴衆ではなくスピーチのメモに注がれ、顔の表情やボディランゲージは弱々しくなりました。この息詰まるような感覚は、英語を話すことに自信を持てなかったときに感じたのと全く同じでした。かつて英語を話すときに体験した困難を、まだ学習が進んでいない中国語でも同じように体験したのです。

しかしながら、この発表は僕にとって良い教訓になりました。外国語で発言するときは、発音や流暢さではなく、「大事なメッセージを相手に伝えることに集中する」ということ

にのみ集中するべき、という原則を思い出せたからです。確かに発表直後は気分が良くなかったですが、この発表を「自分の中国語のスピーチ史上最低のスピーチ」にして、次の発表までにもっと上達しようと思いました。

その一方で、先生方から頂いたフィードバックを頂いて、僕たちが準備不足だったことを痛感しました。テーマ設定が抽象的過ぎた上に、三人が議論なしに別々の個所を作成したため、内容の統一感がなかったのです。

次の日、僕は2人に改善点を切り出すことにしました。

力斗「前に発表した内容は三人が担当した箇所に独立した内容が多すぎて一致性がなかったね。僕自身も国際社会であるにも関わらず、日本人としての経験や感じ方を活かすことができなかった。二人もなにか反省点はある？」

詩穎「そうだね、何個かあるテーマの中から一つに絞っていいと思う。例えば、一人っ子と兄弟姉妹の問題とか。私は年の離れた弟がいるけど、彼との間に少し独特な経験を発表で共有できると思う。」

孫騰「はい、私も発表の内容を『一人っ子』のようなもっと小さいものに絞ったほうがいいと思うのです。私は一人っ子ですが、そのことが私の人間関係、または常に感じる孤独感に関係があると思います。」

力斗「うん、自分のバックグラウンドを明らかにするという点で、一人っ子と兄弟姉妹というテーマは『生活誌』のテーマに合致していると思う。ちなみに僕は年が近い妹が一人いる。私たち3人は、家族構成で一人っ子、年の離れた姉弟、年の近い兄妹という風に異なる背景を持っているよね。プレゼンテーションでは、その違いを浮き彫りにして、現代の家族の多様性を強調したらいいと思う。まずは僕たちが育った環境とそれが人格や個性に与えた影響を紹介するのはどうだろう？」

孫騰「うん、単に兄弟姉妹がいるかないかというような事実上の話ではなく、その事実が自分たちの人間関係や人格形成に与えた影響を述べたほうがいいと思います。」



中日Z世代生活志中期报告

私たちの日常の人間関係
于孙腾 周诗颖 森川力斗
2021/11/10

问题1

作为独生子女/非独生子女
你认为自己有哪些幸运的地方?
是否有遗憾的地方?

问题2

作为独生子女/非独生子女
你是否有一些和父母或兄弟姐妹
增进沟通的技巧可以分享?

问题3

你是否想象过自己不是哥哥，而是弟弟，
有一个年长的姐姐?
或者你是否想象过自己是妹妹，
有一个年长的哥哥?

你是否想象过自己有一个兄弟姐妹?
如果想象过，希望是什么样的?

你是否想象过自己有一个不同年龄差的兄弟姐妹?
希望是什么样的?



中間発表のコメントを受け、より具体的なテーマに絞りました。単に兄弟姉妹がいるかないかという事実だけではなく、その事実が自分たちの人間関係や人格形成に与えた影響を振り返ることにしました。

こうして、三人それぞれが過去の家庭環境を簡潔に紹介することになりました。

最初に詩穎が年の離れた弟との付き合い方に戸惑った経験を打ち明けてくれました。そのあと孫騰が、両親が一人っ子である自分に恵まれた教育の機会を与えてくれたこと、その反面、一人っ子特有の孤独感やプレッシャーがあったことを話してくれました。

二人の過去の分析を読んで、親しい人以外に話すのは憚れる家族の話題を、出会う間もない僕に赤裸々に話してくれたことに、自然と感謝の気持ちが湧き上がってきました。そして、僕自身も過去の妹との関係を真剣に分析する意思が固まったのです。

力斗「ありがとう!二人とも経験を正直に共有してくれて面白かった。今度は僕に妹がいたことによる僕の人生への影響を、四つの時期に分けて述べたいと思う。

僕は母方の実家である奈良県で生まれ、父方の実家である広島市で人生の大半を過ごしてきました。妹と私は2歳違いで、現在妹は地元の高校に通っています。

1. 妹に嫉妬していた幼少期

僕が生まれた後、両親は2人目の子供として女の子が欲しいと考えていました。妹が生まれたあと、両親は僕よりも妹と長く時間を過ごしていました。両親が働いていたため、頻繁に私たちの面倒を見てくれていた祖父母は、自分たちに娘がいなかったこともあり、妹には特に良くしてくれたことを覚えています。

僕はもう覚えていませんが、両親から聞いた話では、3歳の時に妹に嫉妬して、彼女を蹴ってしまったことがあります。僕には幼いころから、常に親の注目の的でありたいという強い願望があったのです。そして、常に注目されたいという欲求が強かったために、妹を重要な家族の一員というよりも、両親の注目をかけて争う競争相手として見ていたのです。

2. 妹の前でのパフォーマンス

子供の頃から両親は、僕が妹のお手本になるようにと考えていました。そのことで感じた責任感と、父から「漫画のヒーローのように男らしくあれ」と教えられたことで、僕は強い兄を演じ始めました。その結果、妹の前ではいつもより賢く、強くなり、時にはネガティブな感情を麻痺させ、無理にでも兄のように振る舞うようになりました。つまり、本来の自分とは異なる「年長の男子」の役割を演じることを覚えたのです。

しかし、これには様々な弊害がありました。まず、妹の前では自分の気持ちを素直に表現できませんでした。なぜなら、自己開示することで、自分の弱い部分が妹に露わになることが怖かったからです。2つ目は、常に妹の良いお手本でなければならないというプレッシャーから、妹よりも劣っているのではないかと不安になり、何かで妹に負けてしまうと不必要な劣等感を感じていたことです。それは、自分が理想的な「年長の男子」ではないことを認めたくなかったからです。これらのことが原因で、少年時代に私は妹と過ごす時間を心から楽しむことができませんでした。

3. 個人化の時代

妹が中学で受験勉強を始めてから、僕たちの関係は薄れていきました。まず、基本的な生活習慣が異なり、一緒に食事をしたり遊んだりする時間が減りました。また、勉強してほしいという母に妹が反抗していたこともあり、緊張感のある日々が続きました。一方、僕は中学、高校での表面的な人間関係に苦しみ、人より長い思春期を過ごしました。

僕たちは年齢が離れていなかったことで、同時に「反抗期」「思春期」に突入していったのです。それによって、徐々にお互いの考え方を理解することが難しくなり、些細な喧嘩が多くなり、会話が少なくなっていきました。また時が経つにつれ、僕たちの趣味嗜好や価値観は大きく異なっていきました。

僕は日常生活で自我を保つのに精一杯で、彼女を理解しようと努力することができませんでした。その結果、僕と妹は、お互いを思いやることもなく、干渉することもなく、ただ同じ家に住んでいるだけという、極端な個人主義に陥ってしまったのです。

4. 自分の子供じみた態度を反省し、関係を再構築する

高校時代の3年間、僕は大学受験のための勉強に明け暮れていました。一人で部屋にこもって文章と向き合う時間は、自分がどういう人間なのか、今の状況からどうすれば幸せになれるのかという哲学的な問題を考えるきっかけになりました。

そこでようやく、妹との関係を顧みることができました。私は、承認欲求や人間関係における打算的な考え方、「有害な男らしさ」の呪縛が、周囲の人々との関係を素晴らしいものにすることをどれほど妨げていたか気がつきました。そして今まで持てなかった勇気を振り絞って、自分を変えようと思ったのです。

私は、自分の感情的な問題を妹に告白し、過去に非生産的な行動をとってきたことを謝ることにしました。もちろん、突然のことだったので、すぐには許してもらえませんでした。しかし、私が大学受験を終えた後、だんだんと話をする機会が増えていく過程で、彼女が私を受け入れてくれていると感じました。

僕と妹の間にはいろいろありましたが、最終的にはかけがえのない家族としてお互いを尊重できていると思います。」

この文章を書き終わってから、最初は「生活誌」を作ることの意義を理解しました。それは、様々な文化や価値観が入り乱れ、自らの存在理由を見失いがちな現代において、「自分は何者で、これからどこに向かっていくのか考える」という意義です。

僕は妹との関係を見直す中で、僕の家庭はどんな環境で、どんな教育を受けてきて、どんなことを感じて成長してきたのか真剣に分析する機会がありました。それは、僕という人間の出自を明らかにし、世界に一人しかいない自己を定義していく行為でした。そしてその行為は次に、これから過去の誤りを生かしつつ、どのようにすべての構成員が幸せな家族を実現するのだろう、という未来思考につながりました。

最終発表会では、インタビュー形式で三人それぞれが家族に関する質問に応える動画を作ることになりました。三人の空き時間に zoom で集まり、会話を録画しながら思い思いの気持ちを述べました。詩穎は用事があって途中で退出しましたが、インタビューが終わった後、孫騰と二時間以上雑談しました。中国においてどれほど日本文化が親しまれているかという話題から、中国も保持している核兵器の諸問題まで、幅広く意見を交わして刺激的な議論になりました。

そして、最終発表では詩穎が見事に編集してくれた動画を皆さんに見て頂きました。それぞれが個人の経験を語っている様子は新鮮で、動画を見た人も当事者として考えさせられるような内容だったと思います。



インタビュー動画『日中（非）一人っ子生活体験』（2021）

最終発表が終わった後に、三人で三週間の交流を振り返りました。

力斗「昨日はお疲れ様!最後も楽しく発表することができたね。今回のプレゼンテーションを準備することで、僕は妹との関係を見直すことができた。その中で、家族関係についても新たな発見があり、僕にとってはとても有意義な期間だった。また、孫騰や詩穎との会話は短かったけども非常に刺激的だったよ。二人とも非常に優秀で、他の日本人学生にはないエネルギーを感じたし、未熟な僕の中国語を理解しようとしてくれて、とても親切だった。とにかく楽しい時間を過ごすことができた。またおしゃべりしたい。発表会の最後に二人の感想を聞く機会がなかったから、この場で教えてくれたら嬉しい。」

詩穎「力斗が最初に一人っ子の話をしたときから、発表の動画の編集が終わるまで、私は家族についていろいろ考えたよ。全ての家族がユニークで、その家族の中で育ち、その過去を受け入れられた私たちは幸運だね。これは実は、私自身の特別な人生経験からだけでなく、社会学的研究への関心からも、私が長い間追い続けているテーマなの。この短いやり取りの中では、私の気持ちの一部しか紹介しきれなかったけど、もし力斗が興味あれば伝えたいと思います。」

力斗「はい。ご家族との良好な関係を築くためのヒントはたくさん見つかったけど、これで試行は終わりじゃないよね。今後、家族が増えるに伴い、僕たちはさまざまな問題に直面すると思う。その時に正しい判断ができるように努力しよう!詩穎の文章を書く速さや、動画編集能力には驚いたけど、一番感心したのは、弟を持つ姉としての成熟度だった。いつも正直に話してくれてありがとう。」

孫騰「皆さん、お疲れ様でした!共に過ごしたのはほんの少しだが、すごく楽しかった。私も、力斗さんとの邂逅はとても素敵なことだと心から思う。そして、力斗さんの才能と自律と素直なところに感心して、自分は力斗さんから学ぶべきことがたくさんあるとつくづく実感した。中国では、「九

月何処遠、万里若乗風」という漢詩がある。一時の幕が下りるのは本当に名残惜しいけれど、お終わりが訪れても、きっとそれでも終わらないことがある。美しく散るものはこの短き数週間の日々、散らざるものは私たちの友情の花束。中国も日本もよりよく輝いて見える世界だと信じる。もし力斗さんはこの先の未来に、中国をもっと知りたいって気持ちがあれば、いつでも私たちにご連絡ください。(無論、私からもきっと連絡するよ!)この歌声のように、『いつまでも絶えることなく、友達でいよう!』では、ご健やかで、幸せな日々をお祈り申し上げます!」

力斗「僕も孫騰からいろんなことを学んだよ。僕が出会った人の中で一番向上心と根気強さがあると思う。とても2歳上とは思えないほど大人びているし、僕に何が足りないか教えてくれたみたい。本当に中国語を学んで、この研修に参加して良かった!最後に紹介してくれた詩も美しいね。実は東大の詩吟サークルにも入っているから、その詩を読む機会もあるかもしれない。二人がもし、日本語を練習したかったり、単におしゃべりしたかったり、またはコロナが落ち着いてからから日本に来るときに連絡してください!東京の面白い場所を紹介しますよ。」

孫騰「はい!喜んで!もし力斗さんは今度北京、あるいは、我が故郷の青島に来たら、ぜひ連絡してね、一番おいしい料理亭で奢るから!」

力斗「ありがとう!中国行くのが楽しみになったよ。」

これで国際研修は終わりましたが、僕の中で、おそらく二人の中でも、大きな挑戦が始まりました。それは、「常に変化していく家族との人間関係と向き合うこと」です。つまり、「幸せな家族」の答えが流動的な現代において、最善の関係を不断に模索していく決意が固まったのです。

中日（非）独生子女成长体验问题研讨报告

撰稿：于孙腾 周诗颖

第一部分：主题设计及意义阐述

中国与日本均为东亚儒家文化圈中的重要国家，而在儒家文化的影响下，家庭 / 家族问题对于两国社会而言都具有重要的意义。然而，自 20 世纪后半叶以来，两国在家庭问题方面都面临着具体的特殊国情。

在中国，自 1980 年中央第五次人口座谈会后，“计划生育政策”“独生子女政策”便成为了中国人口政策的主要基调，在此之后只有一个子女的家庭便成为了中国社会的典型家庭。然而，2015 年以来，在新的经济社会条件下，这一政策又发生了较为重大的转变，自十八届中央委员会第五次会议起，“全面二孩政策”在中国逐步推广。而在此背景下，在许多原本的独生子女家庭中，第二个孩子开始诞生。

而在日本，人口与家庭问题同样也是社会关注的焦点。众所周知，日本社会面临着严重的“少子高龄化”现象，根据日本内阁府公布的《令和 3 年版高龄社会白皮书》，日本的高龄化率（超过 65 岁的老年人口占总人口的比例）已经达到 28.8%。与此同时，由于城镇化、泡沫经济破裂等原因，人口出生率也居于世界低位，2020 年仅为 0.7%。

有鉴于人类发展的史实，人口与家庭的问题绝非抽象的话题，而是体现于每一个家庭、每一个社会成员的生命历程之中。政策亲历者的讲述与观察，可以为思考这些问题产生的原因以及未来的解决方案提供重要的见解。因此，我们决定选择（非）独生子女这一家庭结构与个人成长领域的话题作为研讨活动的主要内容，希望以此作为以小见大的视角，更好地增进对于彼此国家世态人情的理解。

同时，这一课题的选择也充分考虑到了本次研修“中日 Z 时代生活志”的主题要求，在研讨的过程中，比起宏大的社会层面的叙事，我们更加关心眼前的个体经验，关注彼此的生活细节，通过回溯并记录在同一时代生活的经历，以共情地理解不同国家同龄人的生存现状与生活体验。因此，在具体的研究形式上，不同于一般的文献研究的方式，我们主要采用了“互相访谈”的生动形式，通过分析三人对于相同问题的不同回答，富有趣味性地展现了各自的独特经历与真情实感。

第二部分：研讨开展情况

本次研讨由于疫情原因，主要采用了线上的形式进行开展。我们所使用的主要有两个平台——日常文字交流时使用的微信（Wechat）软件，以及线上访谈时使用的 Zoom 会议软件。本小组运用上述软件开展的具体交流过程主要分成如下的四个阶段。

第一阶段（11 月 4 日 - 11 月 10 日）：选题沟通阶段。在这一阶段中，我们主要通过微信平台，彼此交流感兴趣的选题。例如，我们讨论了“人际关系”、“有害的男子气质”、“日常的交往方式”等问题，最终经过讨论确定了“独生子女”问题作为研究的课题。

第二阶段（11 月 10 日）：选题中期交流会。在当日晚上，我们参加了老师们组织的选题交流会，根据我们的选题与中日双方的老师们进行了沟通，在听取了各位老师及其他小组同学的意见后，进一步调整了一些细节的方向，决定从更加微观的角度开展我们的选题。

第三阶段（11月11日-11月21日）：开展线上访谈。在中期交流会后，我们制作了具体的访谈提纲，并约定了具体的Zoom会议，最终以三人线上互访的形式进行了两个多小时的交谈。

第四阶段（11月22日-11月26日）：成果短片制作与现场报告。在线上访谈结束后，基于彼此访谈的录像，我们剪辑制作出一份成果短片，以解答共同问题的方式对于研讨内容进行展现。随后，在26日晚的交流会上，本小组基于这个短片，进一步阐述了本次研讨的体会与成果。

第三部分：研讨交流内容

如前方所述，本次研讨活动中，本小组主要采用了线上互访的形式，由三个人回答同一个问题（或相似的问题）的形式，生动展现彼此作为独生子女/非独生子女的不同的生活体验与经历。因此，本部分将主要通过访谈总结的形式呈现。

【受访者的基本情况】

于孙腾，21岁，家中独生子；

周诗颖，20岁，有一个8岁的弟弟，正在上小学；

森川力斗，19岁，有一个17岁的妹妹，正在上高中。

【访谈具体内容】

问题一：作为独生子女/非独生子女，在成长的过程中，觉得有哪些幸运的地方？又有哪些比较遗憾的地方呢？

森川力斗：

我觉得比较幸运的事是，作为哥哥会有一种责任感在心中萌发增长。这种责任感就是自己一定要成为妹妹的榜样的感受。尽管这种责任感有时候会成为一种压力，也有时候会因此感到无法传达自己真实的感情，但我想这也是成长为大人的过程中非常重要的一步。

我觉得比较遗憾的事情是，在我和妹妹的关系之中，因为我和妹妹的年龄非常接近，我们两个人都几

乎在同一时期进入了青春期，或者说叛逆期。在那样的时候，由于我们的性别也不同，年龄也接近，一些个人性质的问题比较难以开口交流。如果我们的年龄相差得更大一些的话，从其中一方，哥哥或者姐姐，年长的一方，就可以更好地照顾年龄较小一方的问题。但是，因为我和妹妹因为两个人同时进入了那种“无法将自己的问题与他人倾诉的时间段”，双方都变得非常个人化了，互相之间的对话，双方的坦率的对谈的进行就变得困难起来，有时候变得甚至无法进行对话。并且因为那个时候都很忙，有时也没有交流的时间。但是，现在的话，这样的问题已经得到了改善，现在双方都可以清晰地把自己真正在想的话倾诉出来。但是高中的时候，初中的时候，这样的事情曾经一度变得很困难，这是我感到遗憾的事情。

于孙腾：

我觉得比较幸运的事情是，作为独生子女，我在很长一段时间内都是家庭关心的中心。并且，虽然我有堂姐、堂妹，但仍然是爷爷奶奶唯一的孙子。中国的传统家族中，特别是对于老人来说，对于“孙子”这个身份仍然保留着一些特殊的重视，认为是家庭血脉的传承人。因此，在小的时候，父母总会竭力满足我的各种愿望。衣食住行、旅游娱乐，各方面都会给我提供可能范围内的最好条件，也一直送我去最昂贵的私立学校。因此，这份额外得到的重视和关爱可能是身为独生子女比较幸运的一个方面。

当然，与此相对地，重视越多，要求和期望也就越大。实际上，虽然父母并没有总是十分明确地说出来，但是依然能比较清晰地感觉到他们实际上热切地期望我在各个方面都取得最优秀的成绩。“我们家只有你一个孩子，你的成果就是我们家的未来”。因此从幼儿园开始，每周六日都会送我去补习班，“语数英”自不用说，还有音乐、美术、演讲、体育等。正因如此，我在童年阶段没有太多可以自由玩耍的时间，相应地，也比较缺少好朋友。并且由于我没有兄弟姐妹，可能在性格上会有一点孤僻的倾向。我想，这份压力和孤独恐怕可以算是独生子女的一些比较遗憾的地方。

尽管如此，这样的压力与孤独也淬炼了我更加坚毅的品质。遇到问题就要勇敢地自己去解决。“天翻地覆慨而慷，人间正道是沧桑。”也因此成为了我的人生格言。而在一路的成长过程中，这样的情形反复地出现，我也一直以自己的智慧与勇气作为双翼，闯关过隘，攻克各种艰难险阻，我想这个或许也是一种“A blessing in disguise”，是身为独生子女的“命运隐藏的礼物”。

周诗颖：

要说幸运的地方，我认为弟弟给我们家带来的一个很大的好处，就是让家庭氛围活跃起来。弟弟出生的时候恰好我刚进入青春期的时候，和父母的话题越来越少，很多事情也难以启齿。但是因为在家里有这样一个小年纪很小的孩子，家庭成员平时说话的语气会更加活泼可爱，而我和父母的交流可以进行得更轻松。自从弟弟出生以后，全家的中心都转到弟弟身上，父母都称呼我为姐姐，甚至我奶奶也叫我姐姐，其实也减轻了我长期被全家人当作中心的压力。我想要是没有弟弟的话，我可能不太愿意对父母说一些心里话。但是因为有了他，我更开朗地度过了青春期。

要说遗憾的地方，我觉得我陪伴弟弟的时间太少了，没能见证很多成长的时刻。他的生日是九月初，每年都正好是我返校学习的时候，不能在家里给他过生日。我上初中的时候学习任务开始变多，和弟弟一起玩耍的时间就变少了；而我上高中的时候是自己一个人在北京，每半年放假回到家乡才能和弟弟在一起待上一段时间；现在上大学也是一样的，有时太忙了就会忘记给家里打电话。虽然和弟弟一起相处的时间少，但是我觉得感情羁绊还是很深的。每次家人在机场送行，他都抱着我的大腿哭十几二十分钟，哭到再也哭不动了才放手。现在他上小学，有很多亲子活动，我都不能去参加，我觉得是很遗憾的。

问题二：作为独生子女 / 非独生子女，你是否有一些和父母或兄弟姐妹增进沟通的技巧可以分享？

森川力斗：

我的建议是，在和兄弟姐妹交往的时候，不要太在意上下关系，比起年龄的差距来说还是上下关系的问题。也不要太在意能力的差距，学习方面具有多强的能力之类的，能够多大程度上回应父母的期待之类的。

这样说是因为，从父母的方面来看，肯定是希望自己的孩子能够变得幸福。但是“希望自己的孩子变得幸福”这种心情偶尔也会变成一种压力。孩子们有时则可以将这种压力“搪塞”过去，或者换一种说法，不是特别认真地应对。从根本上来说，孩子们应该意识到“比起父母的想法，自己认为自己应该有怎样的状态”才是更为重要的问题。

此外，兄弟姐妹之间，果然也会有竞争，如果这样的话，关系也可能因此而恶化，我想也会有彼此不能互相尊重的情况。我认为首先，比起想着竞争的问题，更应该理解彼此的价值观，特别是，在双方的年龄差距比较大的情况下，因为存在时代的间隔，价值观也可能会稍微有些不同。并且双方的朋友也有不同，从他们那里受到的影响也会各异。对于这样的方面，我认为体贴地去理解对方是很重要的事情。

于孙腾：

我觉得第一点是“有话好好说”，有些时候比起说话的内容，说话的方式更重要。一定要不急不躁，心平气和地，跟大家和气地说。例如，我平常有些时候给父母泡壶茶、倒杯水，在家坐在沙发上慢慢说。没有什么事情是我们慢慢说解决不了的、沟通达不到的。有些时候如果人们在家庭沟通的时候，大声说话、喊叫、吵闹，这种方式本身就将带来很多不必要的矛盾。

然后第二点是“多一些爱的表达”。很多时候中国的独生子女可能会比较害羞，在这种情况下，哪怕你是关心着父母的，但你如果不表达出来的话，可能父母也不知道。这样的话他们可能就会有很多担心，担心这个孩子不孝顺之类的问题，但如果说你能经常通过一些方式表达出对父母的关心。比如说关心他们

工作上的压力之类的问题；多感谢父母，多对他们说“谢谢”这样的话，他们就能知道你是爱着他们的。在这样的情况下，如果双方都知道自己是爱对方同时被对方爱着的话，那么就会变得很宽容。哪怕你有些小的问题，父母也不会太过在意。所以说我觉得，让对方知道你爱他/她这件事情是能够化解很多矛盾的一个小方法。

周诗颖：

和弟弟沟通的时候，很重要的一点是不能把他当作小朋友，而是把他当作自己的同龄人。在6岁以前，弟弟很希望自己被当成大人，他经常向我们科普一些他感兴趣的领域，例如高铁运营、汽车性能，我们有时会觉得枯燥无聊，但是还是要认真地听他讲完他了解的这些东西。我觉得孩子们很享受自己被当成小老师的过程，可以让他获得成就感。

我觉得我父母对弟弟的沟通方式也很值得学习。当弟弟和其他同龄小朋友玩耍的时候，父母很强调礼让。不过，当孩子之间起冲突的时候，就算弟弟表现得固执不讲理，父母也不会当即严厉批评，而是代替弟弟向对方道歉，等到回家之后再慢慢复盘，等弟弟情绪不冲动的时候再分析他做错的地方。我自己也是这么长大的，所以我觉得这样的处理方式比较好，维护了孩子的尊严。

我很喜欢观察弟弟和同龄小朋友过家家的过程。有时，这种角色的转换能让我观察到弟弟本身是如何看待这些社会角色的。在师生教学的场景里，当小老师的孩子很认真地“讲授”自己学到的知识，但是当“学生们”走神的时候，“小老师”会表现得有些急躁甚至恼火，而且“学生们”在这种场景下，也会表现出一定的愧疚。我想这反映了孩子们自己在学校里被老师批评时，老师的严格管教的给他们留下的印象。这让我进一步反思自己，有时弟弟不听话时，我很容易失去耐心，从而进行语气不太友好的“说教”，但是这更难被他接受。所以在沟通里，放低姿态很重要。我和弟弟的年龄差如此大，年长的一方尤其需要注意尊重他。

问题三：

（To森川同学）有没过自己不是哥哥而是弟弟，或者说比起妹妹，如果有一个姐姐的话就更好了这样的幻想？

（To于同学）有没有幻想过自己不是独生子女，而有一个兄弟姐妹？

（To周同学）有没有想象过自己有一个不同年龄差的兄弟姐妹？希望是什么样的？

森川力斗：

我没有过“如果有一个姐姐就好了”这样的想法。不过，“如果自己是年龄低一些的一方的话”这样的，曾经有想象过。

除此之外，“如果我不是哥哥，而是姐姐的话”这样的情形也曾经想象过。因为我和她的性别不同，所以我们之间就会有一些难以开口商量的个人烦恼。但如果我是她的姐姐的话，我们就可以全部交流这些烦恼，可能就会更加容易地改善我们的关系。

此外，如果我是年龄更低的一方的话，果然我会想到的是，如果年长的一方的能力更强，能够接受更好的教育，进入更好的学校的话。那么对于年龄低的一方来说，来自父母的期待也会变得更高，而这也成为一种压力。实际上，我的妹妹就面临着这样的情况，因为我的能力相对比较高，父母对她的期望也就更高，她所受到的压力也变得更大。因为这样的缘故，她和父母吵架的情况也比较多。

有关这个问题，我想，当未来我们也为人父母的时候，是一个不得不小心谨慎地对待的问题。作为父母的一方，需要注意留意不要给孩子们施加太多的压力。

于孙腾：

我曾经幻想过要是自己有一个可爱的妹妹就好了。这个主要是因为受到了日本动漫的影响。在我上小学和初中的时候，日本动漫非常流行，在班上至少有一半以上的人都看动漫，所以那也很自然地成为了我们日常交流的热门话题。在那个时候，有很多和我一样的，独生子女的男孩子，看了日本的动漫以后，

都觉得如果有一个可爱的妹妹就太好了。顺带一提，当时在中国非常流行的动漫的名字是，《涼宮ハルヒの憂鬱》《叛逆のルルーシュ》《ヨスガノソラ》《俺の妹がこんなに可愛いわけがない》《ノーゲーム・ノーライフ》等。

当然，后来我稍微长大一些之后才意识到，这些动漫里面对于“妹妹角色”都进行了相当理想化的描绘，都仿佛是“小天使”一样的理想女性。但是，正如《凉宫春日的忧郁》的主人公阿虚在动画第一集就吐槽的那样，“现实总是意外地残酷”。在现实中，真实的妹妹想必很难真的像动漫中那样美好。因此，我们这些独生子女的想象恐怕也只算是一种妄想吧，不过，有时候，理想正是因为无法实现，才因此永远显得格外美好。

周诗颖：

其实照顾弟弟久了，难免有时候失去耐心，所有有时会希望自己有一个哥哥，是反过来被照顾、被包容的那一个。我不是很希望有一个年龄差小的弟弟，因为如果他和我差不多，我担心自己容易被欺负，而且当我还不是很成熟的时候，也容易和他产生矛盾。其实12岁年龄差很微妙，有时候会被误认为是年轻妈妈，但是也出乎意料地很合适，我觉得这是很好的安排。

第四部分：结语

本组从森川同学对中国独生子女家庭经历的好奇和疑惑出发，选定了“中日（非）独生子女的生活体验”的主题，各自分享了自己的家庭生活经验和独特故事。在交流中，我们讲述了自己的成长轨迹，了解了彼此的心理历程，感受到了每个家庭的独特之处。

每个同学对于自己的家庭构成都有独特的感受：有妹妹的同学会因为青春期的隔阂感到困扰，而没有妹妹的独生子女同学反而希望过自己有一个可爱的妹妹，与弟弟年龄相差太大的同学则想体验被当作妹妹的生活。

在不同的家庭中，父母有不同的期待：独生子女会面临长期被当作家庭中心的压力，而非独生子女也需要面对被视为榜样的压力和不得不进行的自我激励。大家都有各自的压力来源，这或许当前是中日社会中大学生共同需要面对的负担。不过，我们都在家庭中获得成长，坦然面对这些“安排”，本身就是很幸运的。

短期的交流只能呈现一部分成果，在独生子女和非独生子女的家庭中，个人如何与家庭成员的互动是永恒的话题。而将这个话题置于国家与社会的领域，个人的生存体验、家庭内部的伦理关系、社会组织的包容与运行，因其总能深刻影响社会稳定与国家发展的缘故，而将会成为相关领域中永恒的重要问题。

生活という共通言語

研修中に、ふと僕の家族と友人が常に中国人に対して激しい偏見を持っていたことを思い出しました。「中国人はいつも道端に唾を吐く。」「日本の会社が親切に中国で食品加工技術を指導したとき、中国人は指導が終わると礼も言わずに日本人を追い出した。」「中国では反日教育が行われていて、日本人を毛嫌いしている。」

こんな話を何百回聞いたか分かりません。何も個人の噂だけに限らず、メディアの中にも似たような話は溢れています。僕たち日本人は、余りに日常的に、中国人を含めた外国人を、その外国に関する固定観念でカテゴライズしています。

だけれど、それは目の前にいる一人の人間と僕たちの個人的な人間関係と何か関わりがあることでしょうか。

確かに、日本においては非常識な、倫理観に悖ることが中国で行われていることは事実かもしれません。しかし、それだけで全ての中国人が非常識で倫理観を持ち合わせていないということにはなりません。そもそも、世界共通の常識や倫理観なんて存在しないはずです。

それでも私たちが一方的な常識や倫理観を押し付けがちなのは、根本的に無知であることが原因でしょう。今まで日本にしか住んでいない僕のような人にとっては、外の世界は自分の身に何が起こるか予測がつかない危険な場所に思えるのが普通です。だから、外側の世界を少ない情報でカテゴライズし、できるだけ危険が身に及ぶ可能性を避けているのではないのでしょうか。日本に限らず、今の世界はそういったネガティブな区別が溢れています。アメリカ人とメキシコ人、インド人とパキスタン人、ロシア人とウクライナ人…数えようとしたら終わりが見えません。これはまるで、皆が情報のバブルの中に住んでいて、そのバブルの表面を通して他のバブルにいる人々を見ているようです。

でも、一旦そのバブルを抜けて、外の世界の人とお互いの「生活」について会話すると、彼らとの根本的な共通点がたくさん見つかります。例えば、みんな美味しいものを食べて、ぐっすり眠ることを重要視していること。周りの人と良好な関係を築いていきたいと思っていること。

そのことに気づいた瞬間に二人を隔てていたバイアスの壁は消え、相手の感じ方に心底共感することができます。普段使っている言語は異なっても、この「生活」という、人類の共通言語は互いの理解の懸け橋になりえます。

ここで安易に博愛主義を唱えているわけではありません。僕自身も相手が「いい人間か悪い人間か」の区別は付けます。ただこの研修を通して、初めて目にした文化や価値観の差異を「当たり前のこと」だと思える範囲が広がったように思います。そして、バブルの表面を通してではなく、より相手の人間性を直視して価値判断ができるようになりました。

従来の固定観念を取り払い、相手を肉眼で見る事が出来たその時、僕と相手との関係は一気にかけがえのないものになったのです。それがこの研修で得た一番大きな気づきであり、また国際研修に参加しようとしている動機です。

(森川力斗)

九州何处远，万里若乘空

在刚刚过去的深秋时节，我有幸参加了由中国人民大学与日本东京大学联合主办的以“中日 Z 时代生活志”为主题共同研修活动。在三周时间里，我与同班的周诗颖同学同东京大学教养学部的森川力斗同学一起，基于自己的亲身体验与所了解的社会现状，展开了有关中国与日本的独生子女问题的交流与研究。

就研修内容本身而言，我认为这是一场富有意义的相互理解的过程。作为一名独生子女，我第一次如此深入地听到了两位有兄弟姐妹的同龄人的成长经历与心路历程。例如，在听到力斗同学的分享前，我对于日本家庭中的兄妹关系的认识仅仅停留在日本动漫里的描绘，而通过力斗同学的讲述，我才真正意识到现实的兄妹关系所具有的复杂性——时而会因为父母所给予的关注度的差异相互吵架，时而会因为性别的差异而使相互间的沟通变得困难，时而需要经过漫长的理解与体谅才能真正向彼此打开心扉。再如，通过诗颖同学的分享，我才得以了解到在“二孩政策”出台之后刚刚有了一个小弟弟、小妹妹的同龄人的体验，例如家庭氛围因此发生的改善与自己肩上需要更多担负起的责任。

在相互理解的同时，我想这也是一次更深层次的“理解自己”的过程。在向两位同学分享自己经历与心情的过程中，我也获得了一次认真回顾自己过往成长经历的机会。越是望向记忆的深处，我越会发现自己很多性格特点得以形成的缘由。这样的反思一方面为我思考自己日后的个性发展提供了裨益，另一方面也让我重新审视自己与家人们的关系，开始反思今后应该以何种方式更好地与父母相处。

然而，在研修课题之外，本次活动中，我认为自己更大的收获是结识了一位来自邻国的好朋友——森川力斗同学。在交流的过程中，他的很多方面都给我留下了非常深刻的印象。例如，他具有十分坦率开朗的性格，在谈话中能够率直清晰地表达自己的观点。再如，他十足的“理科学霸”气质，偶然间看到的他做数学题时留下的漂亮的运算过程也让人自愧不如。此外，还有他努力与我们用汉语进行交流的意愿，仅仅通过两个月的汉语学习竟然能够达到这样流畅的语言水平实在令人惊叹不已。而最重要的是，从他的身上，我感受到了一种非常强烈的积极向上的人生态度。而在当今这个中国“躺平族”“佛系青年”与日本的“さとり世代”“ゆとり世代”层出不穷的社会大背景下，这种积极进取的精神显得尤为难能可贵。

在距今约 1300 年前的唐代，诗人王维在送别遣唐使阿倍仲麻吕回国之时，曾经留下了《送秘书晁监还日本国》的著名诗篇。诗中名句“九州何处远，万里若乘空”的本意是指前往日本的旅途非常遥远，海上行舟万里仿佛登上天空一般困难，以为最终表达“别离方异域，音信若为通”的感慨与心愿进行铺垫。在千年前交通与信息尚不发达的时代里，或许确实如此。

然而，我却认为在当今时代，这句诗应当被给予崭新的解读。“九州何处远”并不是一种感慨，而可以成为一种反问，其真意乃在于“世界之中，任何地方都不遥远（九州の中に、どこまでも遠くはない）”。“万

里若乘空”也不再是“难于登天”的含义，而是“哪怕相隔万里，只要我们的情谊相通，我们的音讯与心情都将乘着这片共同的天空而到达彼此的身边（お互いの心さえ通じ合っていれば、たとえ万里離れていても、私たちの便りと気持ちはこの青空に乗せて、お互いのところに届くことができる）”。

而在本次的“鉴影度形”式的交流活动中，我与力斗的交流正是这一诗句新解的最好注释。哪怕在活动已经结束的当下，我们仍然每天通过微信交流自己的日常生活并向彼此询问感兴趣的问题。例如，力斗向我介绍了他平时的膳食习惯，在他的启发下，我正在改进每日的饮食食谱，希望能够让身体更加健康。而我也向力斗介绍了自己正在阅读的日本小说，并期待之后与他一起交流感想。

国之交，在于民相亲，在中日两国关系存在或大或小障碍的当今时代，国民与国民的交流则显得格外宝贵。而对于两国的青年人来说，不蒙蔽于大众媒体有失偏颇的报道，不盲信于本国社会所描绘出的对方的刻板印象，架起沟通的桥梁，打通交往的“心”路，才能真正触碰到异国朋友手心的温暖，并从中汲取彼此并肩前行的力量。因此，倘若让我用一言为本次交流活动画上暂时的句号的话，那一定是那首著名的友谊之歌——「いつまでも絶えることなく、友達でいよう！」

（于孙腾）

常棣之华——二孩家庭的得失思考

本次“中日 Z 世代生活志”的交流活动中，我们小组选择的这一话题对于我而言很有发挥空间，因为在独生子女到非独生子女的身份转换中，我本人产生了诸多改变。通过这一次活动，我回顾了自己与家人相处的细节，反思了自己成长的历程，主要形成了以下感想。

家庭情况：12 岁那年，我意外“收获”了一个弟弟。如今，弟弟现在上小学三年级。当他出生时，我刚上初中，悄然步入青春期，是性格转变的重要时期。

1. 性格变化

弟弟出生前，我是家里从非常受宠的小公主，是对情感比较淡漠的独生女；弟弟出生后，我觉得自己开始变得有责任感和爱心，变成逐渐活泼起来的姐姐，有时甚至觉得自己是年轻妈妈。相比作为哥哥的森川同学，我与弟弟的较大年龄差反而能让我更打开自己。当弟弟还是小婴儿的时候，我作为年长的一方，在那时成熟程度已经足以照顾和陪伴他，而不会引发同辈间的矛盾。

2. 心态变化

在弟弟出生前后，父母一直比较宠我，对我的态度和教育没有太大变化，但是我自己的心态反而有一些变化。弟弟比我小很多，父母的年龄相对于弟弟也偏大，所以他们没有那么多的精力和耐心，像从前照顾我一样照顾弟弟。出于对弟弟弥补的想法，我一直认为我需要多付出一些时间去照顾弟弟。似乎这样才是对两个孩子都“公平”的。在我们的父辈，“重男轻女”是很普遍且很严重的现象，因此我发现自己在变成非独生子女之后，我很在意家庭相处模式是不是对每一个孩子都“公平”这样的问题。

家庭氛围

弟弟的到来让家庭氛围逐渐活跃起来。弟弟出生之前，我经常处于阴郁的状态，不常与父母交流。但正是因为在家里出现了这样一个年纪很小的幼童，家庭成员平时说话的语气会更加活泼可爱，而我和父母的交流可以进行得更轻松。不仅仅是我变得更开朗，父母的性格也变得更明媚了一些。

4. 成长观察

弟弟经常表现出惊人的懂事程度。在他出生之前，我比较反感这个年纪的孩子，会出于刻板印象而远离

这些“熊孩子”，但是一次让我有了很大改观。有一个假期，弟弟总是缠着我陪他玩，但是我很快失去耐心，以“生了病想睡觉”为借口回到自己房间。过了一段时间，我听到三下轻轻的敲门声，意识到是弟弟来了，于是盖上被子闭着眼睛装睡。然后我听到他脱下拖鞋，轻轻地走进来，把一个东西放在我的床头柜，然后又轻轻地走到门口，把门关好，最后离开。我一睁开眼，发现他给我拿了一瓶热牛奶，然后发现我“睡着了”，就乖乖地走了。那时他刚满4岁。除了这件事，弟弟后来做了许多让我们感动的事，让我怀疑这究竟是孩子们都会做的事，还是超出他这个年龄阶段的成熟感。无论如何，我都因为这些经历而学会更加包容，也更乐于去记录他成长的点点滴滴。

5. 个人期望

父母对我们俩的交流风格是因人而异的，我的性格偏于安静，弟弟的性格偏于活泼。但是父母对我们的期望差不多，并没有很高，只是希望我们能够找到自己喜欢的事业，从事能够养活自己的职业就可以了。但是作为姐姐，反倒是我对弟弟有一些期望。常听到有人说，父母会把自己的遗憾转变为给子女的压力，我觉得自己的心态有些类似。小时候有过一些崇高的理想，长大了难以实现，就想投射在弟弟身上。我认为这不是一种很好的期望，但是不自觉地产生了。不过我也希望自己走过的弯路，能转化为人生经验供他参考。

(周诗颖)

02. 私と新世紀エヴァンゲリオン

【研修記事】

我和新世纪福音战士交流报告

高山暉啓 趙黛霖 23

【研修感想】

1か月の学び

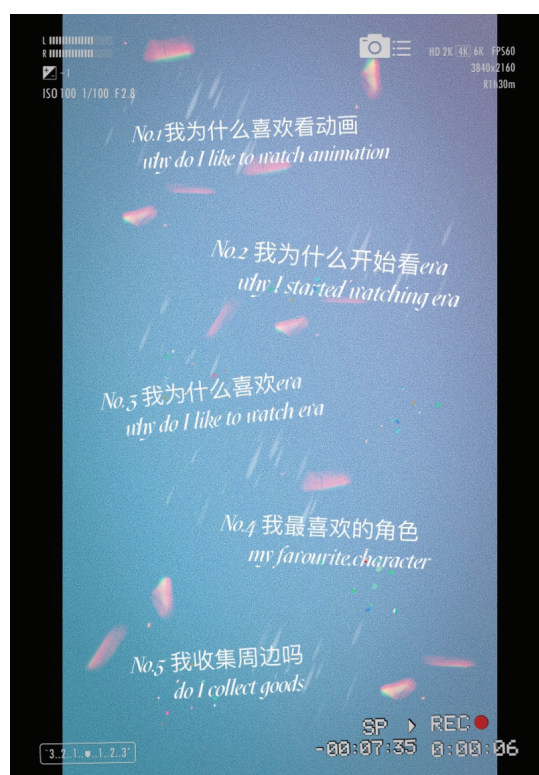
高山暉啓 31

跨越不同，以“二次元”的方式

趙黛霖 32

《我和新世纪福音战士》交流报告

撰稿：高山晖启 赵黛霖



最終発表 plog の表紙と目次

我们的报告分为两个部分，第一个部分是这次研修活动中，我们汇报的主体内容，在这部分内容中，我们以《新世纪福音战士》（新世紀エヴァンゲリオン）这部动画为切入点，交流了自己作为动漫爱好者的个人经历，以及对EVA这部动画和它衍生出的一些现象的感受。我们从“我们为什么喜欢看动画”“我为什么喜欢EVA”“我为什么开始看EVA”“我最喜欢的角色／我为什么喜欢ta”“我是否会收集动画周边”这几个问题出发，完成了一次关于“二次元”的交流。在二部分是高山同学在整个交流活动的进行过程中，以日记形式记录的一些感受，补充了我们在交流时提到的一些其他有意思的内容，十分有趣。

第一部分：研修汇报主体内容

【我为什么喜欢看动画？】

赵黛霖：

• 童年时期——点播台

小时候看家里的电视，有一个频道会专门播放动画片。放映的形式在今天看来很有趣，在中国叫“点播”，也就是给电视频道打电话，付费选择自己想看哪部动画。日本动画在其中占据了绝大部分。我小时候几乎每天都在这个频道上看动画，因为小时候没有钱，所以从来没有尝试过点播。“放映哪部动画”和“从哪集开始放映”对我来说都是随机的，即便这样，我依然在这个频道看了很多日本经典动画。比如《数码宝贝》《火影忍者》《游戏王》《哆啦A梦》等等，这个频道让我逐渐开始对日本动画的兴趣，日本动画对我的影响也一直持续到今天。



风靡一时的点播台承载了90后的童年

• 初高中时期——互联网

这个时期大部分动画都开始在互联网上流通，我的身边的朋友也正是在这段时间开始接触互联网。我们都会在互联网上找自己喜欢的动画，不过在这段时间，因为大家的版权意识都不是十分浓厚，所以很多动画其实都是盗版资源。（但也正因如此，这些动画数量庞大，并且非常容易找到），我和我的朋友们在这段时间观看了大量的、各种各样的日本动画。日本动画在这个时期给我最重要的影响是，我开始通过动画了解到日本的一些文化，并对日本各方面的文化产生了浓厚的兴趣。比如在《文豪野犬》中，我了解到日本的许多作家，比如太宰治、芥川龙之介等等，后来又接着读了很多日本文学作品。

• 大学时期——视频网站

这个时期，对于动画的管理逐渐规范化。中国会引进很多影响力大的日本动画，有专业的视频网站购买他们的版权，在自己的平台上播放。我也是这类视频网站的会员之一。对于现在的我而言，首先动画也是我逃离现实世界的一种方式。我可以短暂脱离现实生活中的一些任务，沉浸于那个充满想象力的精彩世界里。其次，由于我的专业是电影学，我开始学会用更专业的眼光来评价一部动画，发现它们的艺术美感。我发现，动画和电影的艺术手法有很多相似之处。但是动画在形式上会更加自由，所以它所能承载的内容也可以更加丰富。同时，我也可以引入一些专业理论来进行对动画的分析，在某种程度上，看动画也可以促进我对专业的学习。

高山晖启：

我从小就喜欢看动画。小的时候我住在上海，当时在上海，有很多卖便宜的光盘的店，我经常在哪里买日本动画的光盘。我对日本的学校生活有一种憧憬，对当时的我来说，看动画是了解日本的生活的最好的一个方式。

13岁的时候我回到日本了。在日本上初中高中的时候，我也经常看动画。这个时候，看动画的主要的目的是逃避现实。我看动画时，我可以忘掉现实，还能感觉自己好像当了主角是的。此时，我也受了不少动画的影响。我在初中时加入了网球的社团活动，这是因为我看了动画《Baby Steps～网球优等生～》后觉得打网球很酷。我在高中时开始了打日本象棋，这也是因为我看了动画《三月的狮子》，一部以日本象棋为主题的动画。网球和象棋都是现在的我的业余爱好。

【我为什么开始看EVA】

赵黛霖：

在我上初中时中国有一段时间非常流行关于动漫介绍的杂志，比如《看动漫》《动漫贩》《动漫水晶》等等。在我买回来的杂志中，经常看到EVA的相关推荐，我感到很好奇，就开始看这部动画。尽管当时距EVA正式上映的时间已经过去了很久，但我还是被它深深吸引了。

高山晖启：

我是这样的一个动画的爱好者，我最喜欢的动画是《新世纪福音战士》。《新世纪福音战士》是庵野秀明的作品，从1995年到96年在日本的电视上被播放的。它非常流行，成为了一种社会现象。但我并不属于那一代人。那么我是如何喜欢上它的呢？我第一次看到是在初中三年级的时候。当时我特喜欢看动画，大部分的当时的动画我都看了，所以有一天我问我的朋友有没有什么有趣的旧的动漫，此时他推荐我的就是《新世纪福音战士》。我从那时候开始看它了。

【我为什么喜欢EVA】

赵黛霖：

首先，我很喜欢EVA的视觉风格，EVA的色彩是比较鲜明的，比如EVA机体的颜色，以及每一集动画片头，标语型的黑白色高反差超大字体来强调和突出主题，都是一种让人印象深刻的风格。同时，EVA的设计具有科幻感和历史感。和很多科幻作品不同，EVA里的未来世界不是华丽时尚的，反而给人一种孤独寂寞的感觉。这种独特的风格吸引了我。并且，EVA的动画风格还给人带来宗教感、神秘感，这也是扎根于EVA故事架构的元素，大量取材自圣经以及以人类净化为终极使命的NERV组织给影片增加了浓重的宗教色彩，SEEL等幕后主使的身份也很有神秘意味。

其次，EVA的故事也很特别。它最主要讲的不是机甲战斗，而是一群不善于交流的人之间的故事。在学术研究中，将这种叙事风格命名为“世界系”（セカイ系），它的叙事特点主要是：1. 男主人公“我”和女主人公“你”之间的小故事直接关系到世界末日和人类命运的大叙事；2. 但这种设定的历史、政治和社会背景几乎没有解释，只关注“我”的心理活动的塑造。3. 通常是女主人公“你”为人类的命运而战，而男主人公“我”作为弱者和无能的代表被排除在战场之外。EVA中的角色，在表现战斗的同时，其实更多地展现出了他们的人生经历和他们的个体感情。我看的时候很容易找到共鸣。

高山晖启：

我一看它，我就喜欢上它了。它吸引我的第一个理由是它拥有的科幻特色。我非常喜欢科幻，科幻动画里的建筑物什么的能带给我对未来的期待。第二个理由是，它的又独特又神秘的气氛。《新世纪福音战士》具有一种非常独特的气氛，它是在别的动画里看不出来的。最后的理由是剧中的人物。这些人物都非常，令我产生共鸣。

【我最喜欢的角色 / 我为什么喜欢ta】

赵黛霖：

我喜欢葛城美里。她一开始就在追求纯粹的事物，比如纯粹的爱恨和 EVA 的真相。她和加持良治在追求真相这件事上同样坚定，即使最终他们都一定程度上因为追求真相失去生命，从年龄上看她处在少年和中年之间，她虽然是大人，但还是保留了一些少年人的性格，否则不会冒险调查 EVA 的真相。与此同时她又不像少年人如此单纯，她冷静地看透他人和自我的缺陷，所以才会愿意给予那些少年人指导。

美里是既坚强又温柔的人，我能从她的行为中感受到她个性的闪光点，也希望自己能够拥有这些品质。

高山晖启：

在所有《新世纪福音战士》中出现的人物里，我最喜欢的是碇真嗣。他是剧中的主角，但他的个性与其他动画中的主角完全不同。他不像大多数动画的主角那样勇敢，他经常从战斗中逃跑、拒绝与敌人作战。但是反而因此我特别喜欢他。我每次看他，我都对他的想法有同感。在剧中，他也最后还是决下心去战斗。这让我想到，在关键的时期我也需要有拿出勇气，要勇敢得去面对困难。

【我会收集商品周边吗】

赵黛霖：

我一般不会买价格高昂的手办（フィギュア），因为 EVA 这部动画在中国也引起了很大的反响，所以 EVA 手办的价格也相当昂贵。今年的新剧场版上映后，在网站上售卖的绫波丽等身手办甚至达到了 8 万人民币的高价，但依然吸引了相当多狂热粉丝购买。

不过，国内会售卖很多和 EVA 联名的商品。相较于手办而言，价格不是那么昂贵。比如雨伞、巧克力、耳机等等，看到喜欢的我也会买下来。

其实我很喜欢收集东西



但是，eva的商品都不便宜😭

高山的书柜，确实有点收集控的意思

高山晖启：

简单地总结一下我和《新世纪福音战士》商品的关系。我没有习惯收集动漫的商品。其实，我特别喜欢收集东西这个行为。这一点从我小的时候就没有变。我小的时候非常喜欢收集微型汽车，我还记着我的母亲经常批评我说收集它完全是就浪费钱。现在呢，我喜欢收集漫画，如果我拥有的所有漫画加起来，大概有 1000 多本书。可是动漫商品与漫画完全不同，动漫商品都比较贵。我不收集它，是因为我知道万一开始收集的话，必定会花一大笔钱。



黛霖的实（食）用主义，多吃不胖！

第二部分：高山的交流日记

十月二十号 星期三

今天上午我偶然发现了一个看起来很有趣的课程。它是一个国际交流课程，在此课里我们东京大学的学生与中国人民大学的学生在线上交流。我一看就感兴趣了。正好我也想提高我的中文水平。对我来说，这是个很好的机会去练习中文。我决定了，我要去参加这个课。

十月二十一号 星期四

要是想参加国际交流课程，我要提交选拔课题。可是我真的不知道我应该写什么好。看起来，我要好好想一下为什么我要参加这个课。真的只是为了练习中文吗？这确实是一个理由，但我觉得还有别的理由。

十月二十四号 星期日

我认为有两个重要的观点。第一，我的母亲是中国人。第二，我小的时候住在中国上海。对于中国，从小到大我一直都有一种复杂的感情。也许我的经历让我对这个课程很感兴趣。我必须把我所想的都表达出来。

十月二十七号 星期三

今天我终于完成了课题。我已经表达了我所有的想法。我现在只希望我能够将这些想法都表达给老师们。

十月二十九号 星期五

因为今天中午要通知课程选拔的结果，我整个上午都感觉不安。十二点钟的时候结果来了。我通过了。我非常高兴。但是，我要在第一节课之前准备好自我介绍，这可是个难题。

十一月三号 星期三

我做好了我的自我介绍。我希望我可以向同学们介绍我的为人和我的爱好。其实，我对演讲不是很有自信，好紧张。

十一月四号 星期四

今天是国际交流课程的第一节课。大家的自我介绍都很有特色。今天我们还决定了以后的活动小组。我跟中国人民大学的赵同学成为一个组了。赵同学说，她也很喜欢日本的动漫。我能和她交流，我们有共通的话题，我真的很期待之后的交流。

十一月五号 星期五

今天我和赵同学讨论了我们应该选择什么主题。我们想出了一些主意，比如食物、动画还有文学等等。我们决定过几天在正式选择主题。我们在谈论动漫上用了不少时间。我们都喜欢《新世纪福音战士》。对我来说，这也是一个惊讶。

十一月九号 星期二

明天是期中汇报会，所以我们讨论了一下在期中汇报会发表的内容。然后，我们决定了两个主要观点。

首先是动漫给儿童的影响。动漫可以给小孩好的影响，同时也可以给小孩不好的影响。我觉得动漫教了我很多我应该遵守的规则还有道德什么。赵同学说，她感觉在童年的时候，动漫确实也给了她教育方面的影响，但是情感方面的影响更大。比如说，什么是“友情”、什么是“奉献”等等。我们得到的一个结论是，这可能是因为我们所看的动漫题材不同。比如说，赵同学介绍给我的中国武侠为背景的动画很有特色，里面的人物都是那种很潇洒、很讲义气，比较热血。我觉得在日本很少看这样的动画。

另一个观点是，中日通过动漫的交流。这几年中国的动漫在日本很受欢迎，我们关于此话题也交换了一下意见。

十一月十号 星期三

今天我们进行了期中汇报会。在期中汇报会，老师们建议我们说，我们因该更加注重个人方面，比如说我喜欢什么动漫、我为什么喜欢动漫、我喜欢什么角色等等。

发表会结束后，我们进行了讨论，得出了以下两个方向。一个是，我们两个人一起对同一个动画做讨论，梳理出我们两个人感受的想法，然后比较一下。还有一个是，每个人各自选择一个动画，在两个不同的动画之间比较一下。

最终，我们的结论是，和老师们商量完之后在正式决定我们的方向。

十一月十二号 星期五

今天我们还讨论到了一些从日语翻译到中文的单词。比如说，“宅男”这个中文的单词指一些比较爱在家看动漫、打游戏的人。中日的语言交流很有趣。来源在日语的“オタク”。中国和日本自古以来就有很多文化交流，我真的希望今后这样的文化交流能继续下去。

十一月十六号 星期二

今天我们决定了我们的方向。我们一起选一部都喜欢的动画，然后谈一下有关的个人经验，再去比较它们之间的不同。比如，“第一次看这部动画是什么时候”、“最喜欢哪个角色”、“对自己产生了怎样的影响”、“这部动画在两国的评价都是什么样的”等等。我们选的动画是《新世纪福音战士》。

十一月十七号 星期三

今天，我们谈了很多关于《新世纪福音战士》的事情。

首先是关于喜欢《新世纪福音战士》的理由。我

们喜欢它的理由大概都一样。我们提出来了《新世纪福音战士》拥有的独特氛围、视觉风格、故事内容等等。

然后是关于“最喜欢哪个角色”。我和赵同学最喜欢的角色不同。我喜欢的是剧中主角的碇真嗣。他的个性与其他动画中的主角完全不同。他不像大多数动画的主角那样勇敢，他经常从战斗中逃跑、拒绝与敌人作战。但是反而因此，我特别喜欢他。我每次看他，我都对他感觉共鸣。在剧中，他也最后还是决下心来战斗了。这让我想到，在关键的时期我也需要拿出勇气，要勇敢地去面对困难。赵同学喜欢的是葛城美里。她说，美里是既坚强又温柔的人、能从她的行为中感受到她个性的闪光点，也希望自己能够拥有这些品质。虽然我们最喜欢的角色并不一样，但是两个人都同意的是，《新世纪福音战士》中的人物都使人产生共鸣。

其实，如果没有这个机会，恐怕我也永远不会仔细地去思考我为什么喜欢真嗣。通过这一次的思考，我觉得我对自己也有了更多的了解。

十一月十八号 星期四

今天，我们和老师们进行了进度汇报会。老师们向我们介绍了许多关于《新世纪福音战士》的书籍。我原来根本不知道有那么多关于《新世纪福音战士》的学术研究。作为一个动漫迷，我兴奋地想，也许将来会有对于动漫的研究，就像现在的对于文学的研究一样。

十一月二十一号 星期天

今天赵同学告诉了我一个很有趣的现象。她说，有的中国网友把《红楼梦》和《新世纪福音战士》联系起来了。一个是中国的古典文学作品，另一个是日本的科幻动画，一开始我觉得真是一个奇妙的现象，但仔细地考虑之后，我也感觉了可以理解。两个作品的内容虽然相差很大，但氛围和风格还是确实有相似之处的点。我也喜欢文学和动画，把它们联系起来可能是一种新的欣赏方式。

十一月二十三号 星期二

今天赵同学跟我说，她在看了日本的动画片之后，

对日本的作家产生了兴趣。我自己也是看了中国武侠动画后开始读金庸的小说了，所以我非常同意动漫是一个进入文学作品的很好的方法。

十一月二十五号 星期四

明天是作品发表会。我第一次做了Plog，我觉得我做的还行。我对明天的发表的感情的话，一半是期待，另一半是紧张。

十一月二十六号 星期五

今天是作品发表会。我们的发表进行得非常顺利。我感觉老师对我们的发表的反应也不错。其他小组的发表也都很有趣，有些是关于兄弟姐妹的、有些是关于学校生活的、有些是关于食物的。最终发表完了，我感觉这个月过得真快。



汇报结束，大家看起来都轻松了许多

十一月二十七号 星期六

今天是我开始写最终报告了。我不知道我因该写什么好。我的确从交流中学到了很多东西，就是很难用语言来表达它。

十一月二十八号 星期天

关于最终报告，我想出来了一个好主意。我把我的日记总结一下就好了。这一个月中的我所想的内容都在这里呢。

十二月二号 星期四

我终于完成了我的报告和感想。说实话，开始我觉得要写两个文章，真的挺麻烦。但是，当我今天写完它的时候，我感觉到它的意义了。其实，整理整理我在交流中的思考是一个很有意义的行为。从这一次的交流，我真的学到了不少东西。我的中文水平也有不少长进。唯一遗憾的就是今年我们没有机会在线下见面，真的很可惜。要是明年还有机会的话，我还想参加这个活动。

以下、引用された画像の著作権の帰属先を記します。

4 ページ

左上：勝木光・講談社/NHK・NEP

右下：羽海野チカ・白泉社（マンガ Park サイトより引用）

9 ページ

全 4 枚：株式会社カラー

10 ページ

全 3 枚：株式会社カラー

11 ページ

全 1 枚：『新世紀エヴァンゲリオン』貞本義行、角川コミックス出版

12 ページ

全 3 枚：株式会社カラー

15 ページ

左：『新世紀エヴァンゲリオン』貞本義行、角川コミックス出版

右：株式会社カラー

16 ページ

全 2 枚：株式会社カラー

The following is the list of the copyright holders of the cited images. All images are quoted only for presentation purposes. Since the copyright of all images quoted in this slide belongs to the copyright holders, please refrain from spreading them.

p.4

upper left picture: Hikaru Katsuki・Kodansha/NHK・NEP

lower right picture: Chika Umino・Hakusensha (cited from website of Manga Park)

p.9

four images: khara, inc.

p.10

three images: khara, inc.

p.11

one image: Yoshiyuki Sadamoto・KADOKAWA

p.12

three images: khara, inc.

p.15

left image: Yoshiyuki Sadamoto・KADOKAWA

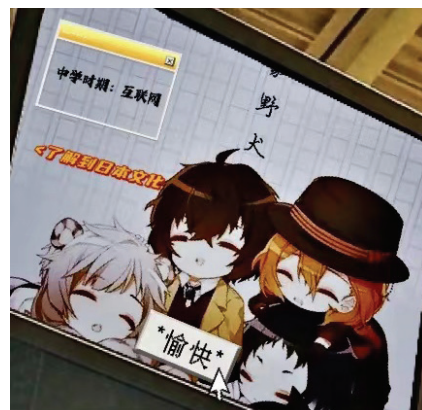
right image: khara, inc.

p.16

two images: khara, inc.

高山同学为 plog 单独制作的图文引用一览。为他的版权意识点赞！

高山さんが作った引用一覧。著作権への意識が高い！



私と新世紀エヴァンゲリオン 発表PLOG（一部）

制作：高山暉啓 趙黛霖



1 か月の学び

本研修の内容に関して自分の感想を一言で言えば、「有意義で楽しい研修だった」ということに尽きます。

有意義に感じた理由は三つあります。本研修では、「自分のバックグラウンドを考える」ということがテーマの一つでしたが、交流や発表の作成を通して自分を見つめなおしたことで、「将来、自分はどんなことをしたいか」ということを考えるきっかけになりました。これは、現在大学三年生である自分にとって、進路を考えるヒントの一つになりました。次に、本研修を通して自分の中国語のレベルが上がったと感じました。中国語を利用して発表作品を作ったり、中国語で会話をしたりするで、自分の中国語の水準が総合的に上がったと感じています。また、会話の中で、口語的な中国語の表現に慣れることができたと感じています。最後に、本研修を通して、知的な刺激を大いに受けました。全体の発表会や普段の交流の中で、中国人民大学の学生たちの知識量の多さや勉強量の多さ、そして好奇心の旺盛さにとても驚かされました。本研修を通して、「自分もっと努力しなければ」あるいは「普段の授業で気を抜いている場合ではない」という気持ちになりました。本研修は、自分の勉強への姿勢を見直すきっかけになりました。

楽しいと感じた理由は二つあります。そもそも、本研修のテーマそのものが非常に面白いと感じました。学術的なテーマではなく、むしろ個人の体験に即したようなテーマだったため、非常に研修に取り組みやすく、中国人民大学の学生との議論も弾みました。次に、先生方のサポートがとても手厚かったことが、自分にとって研修を楽しいものにしてくれたなと感じました。要所で先生方が鋭い助言をくださったおかげで、中国人民大学の学生とのやり取りや課題の取り組みがとてもスムーズに進みました。

ただ、研修の形式に関しては、残念に思ったこともあります。それは、中国人民大学の学生と対面で会うことができなかったということです。「オンライン形式でもこれだけの学びを得ることができたのだから、もし対面形式だったらもっと多くの学びを得ることができただろうに」という思いが最後までありました。もし来年も本研修が開講されるということであれば、必ず参加したいですし、もし参加を迷っている学生がいれば、自信をもっておすすめしたいです。

(高山暉啓)

跨越不同，以“二次元”的方式

这次交流活动给我带来了非常多的收获，非常感谢人大文学院给了我这次机会，也很幸运可以参与今年与东京大学同学的交流活动。

日本动画是从童年开始就陪伴我的一项娱乐，也是我们这一代青年人成长过程中的一个元素。可以说，我身边很少有人从未看过一部日本动画。而对我而言，日本动画也逐渐开启了我对日本文化的兴趣，对我产生过很大的影响。在这次的交流活动中，我很幸运地遇到了同样喜欢“二次元”的日本朋友，在我们交流的过程中，我也了解到他对动画的看法，和自己看动画的一些经历。我们谈到喜欢的动画，喜欢的角色，两国动画的差别，以及动画在本国产生的影响，在深入了解的过程中，我发现我们的爱好有很多重合之处，这让我感到十分惊喜。

除此之外，我们也聊到电影、文学、个人生活等等动画之外的事情，在完成交流汇报的任务之外，关于其他领域的沟通也让我们进一步增进了对彼此的了解，这也有赖于高山同学的中文真的非常流利，每次我们沟通很非常顺畅，也能谈到更加深入的话题。（如果是凭我的三脚猫日语是万万达不到这种程度的……）在能够认识这样优秀的朋友，我也感到十分幸运。

三个星期的交流活动，一转眼就要结束了。但我希望这次交流活动，是我们友情的开始，希望我们的友谊可以一直延续下去。尽管我们生活的地域不同、国家不同、语言不同、习惯不同，但我感受到我和异国的小伙伴们，在内心深处有一些东西是相通的。总有一些话题、一些事物可以引起我们的共鸣，让我们跨越这些不同，在这个彼此隔离的后疫情时代，通过网络拉近每个人之间的距离。这是我从这次交流活动中学到的东西，我想，或许也是人们需要交流的意义所在。

（赵黛霖）

03. 日常の共有

G1

【研修記事】

ほーちゃんとの交流

松村実紗 34

Someday we will laugh all night about our hardest time

陈方媛 37

【研修感想】

中国留学を夢見て

松村実紗 39

关于 HOMIE 组合的二三事

陈方媛 40

G2

【研修記事】

ススキのように

石川禎子 41

“两京一假日”——个性又共性的一天

王友莲 44

“两京一假日”的提出与实现——深入生活，寻找异同

刘畅 46

【研修感想】

自己定義

石川禎子 48

两京一假日——学习之旅

王友莲 49

由点到面：别开生面的线上交流经历

刘畅 50

ほーちゃんとの交流

構成・松村実紗

<参加前>

この研修に参加したきっかけは、同じ部活の鶴海先輩が「中国好きなら、これ受けたら？中国語上達したよ。」と紹介してくれたからでした。まず、1回目のミーティングで発表する自己紹介ビデオのための撮影を始めました。東京大学の学生の1日というテーマです。月曜日を撮影日として選んだ理由は、中国語の授業があり、午後はキャンパスで対面授業、またオンラインミーティングもある、といったとても充実した曜日だからです。友人は私が「中国語の授業で、1日を紹介する動画を撮っているから、映ってくれない？」とお願いすると快く引き受けてくれました。ジムの友達は、その日は忙しくてジムに行く予定をしていなかったのに、入り口まで来てジムの前で撮影させてくれました。動画を撮った後はナレーションをつけました。私の話す中国語を理解してもらえるかが不安だったので、字幕もつけておきました。動画はYouTubeにあげたので、完成した後は出演してくれた友人に共有しました。すると、動画の編集が上手だ、中国語が上手だ、などと褒めてくれました。この自己紹介動画を通して、私は自分の日常生活と同時に、動画編集が好きだということも伝わったのではないかと思います。また、協力してくれた友人たちは本当にかけがいのない存在だと改めて思いました。

<1回目のミーティング>

1回目のミーティングに参加したときは、他の東大生た

ちの中国語能力が高くて少し受けるのが早かったかな、と思いました。でも、みんなの自己紹介ビデオを見て、中国人学生の日本愛を感じ、こういう人たちと知り合いになれることに喜びを感じました。彼らの話す中国語はほとんど理解できなかったので、写真や動画をみてなんとなく内容を予想して見ていました。グループ分けをするとき、正直誰がどのような発表をしていたのか理解できていなかったです。でも、私が陳さんとグループを組むことをお願いした理由は、二つあります。一つ目は彼女の発表が英語だったことです。英語ができることがわかっていたので、やりとりもしやすいだろうと思いました。二つ目の理由は彼女の言動です。陳さんの発表の時、孫文君がカメラを移動して彼女の前におきました。この時、「谢谢」とボソッと言ったのを見て、陳さんの人柄に惹かれてしまいました。私は歌うことが苦手でアニメもあまり見ないですが、陳さんのことをもっと深く知れば、何か共通点があるはず、と思っていました。

<2回目のミーティングまで>

まずお互いの呼び名を決めました。陳さんは「陈方媛」という名前なので、下の名前の日本語読みの頭文字をとって「ほーちゃん」です。私は小さい頃から家族に「みやちゃん」と呼ばれてきたのでそう呼んでもらうことにしました。WeChatでテキストメッセージをしていましたが、なかなか会話が進まないの、電話をすることにしました。この時ほーちゃんはカフェにいて、ネット環境が悪くちゃんと話すこ

とができませんでした。キャンパス内に Wi-Fi はないのかと聞いたところ、Wi-Fi は教室や図書館にはあるが、みんな勉強しているので話すことができない、とのことでした。これは寮生活と一人暮らしの違いだと思います。一人暮らしだと、自宅が自由に話せてネット接続も良いので、テレビ電話を不便に感じることはありません。しかし、寮生活ならば、テレビ電話に適した環境を見つけることは難しいのだな、と認識しました。一段目が机で 2 段目がベットのセットが 4 セットある寮の部屋をよく中国ドラマで見るので、いつか中国に留学したときにはこの部屋での生活を経験してみたいです。

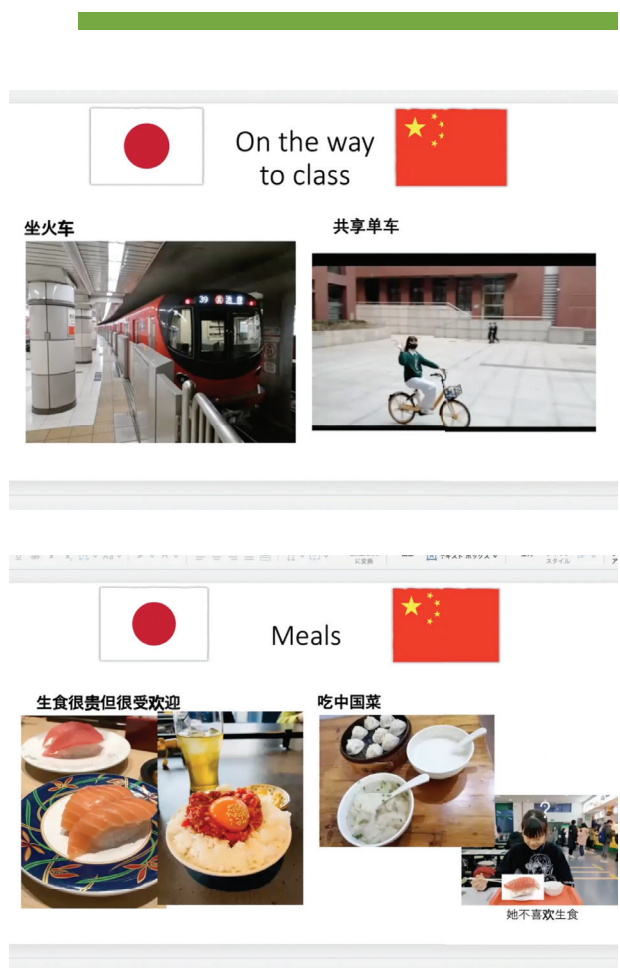
次のミーティングに向けて、何を作るか話し合っていたところ、食べ物話になりました。面白いと感じたのは、ほーちゃんは刺身が嫌いということです。これは、日本食の寿司が当然人気であると思っていた私にとって衝撃でした。よく考えると、日本にいる二人の中国人の親友も刺身を好きじゃないと言っています。私は、サーモンの刺身が大好物なので、1 日に 1 回は食べているのですが、その写真を送ると「この料理、私は絶対に食べないよ笑」という内容のメッセージが返ってきます。日本にいる友人の刺身嫌いは偶然だろうと思っていたのですが、ほーちゃんまでもが刺身嫌いになると、食文化の違いがあるのだなとようやく理解しました。また生魚が苦手な人がこの世には存在することを知って、私にとって美味しいものが必ずしも相手にとって美味しいとは限らないということを肝に銘じました。最近、海鮮料理の美味しい鎌倉に日本人の友人と遊びに行ったのですが、お昼ご飯を決めるときに「刺身苦手じゃないよね？」とちゃんと確認しました。

また、ほーちゃんはサッカーをしています。これは、私がボディビルをしているというスポーツ関連でいい共通点だと考えました。ジムでほのぼのとトレーニングをしている私からすると、夜遅くまでサッカーをしているほーちゃんは尊敬に値します。夜の 11 時くらいに「今からシャワーを浴びてくるね。」とメッセージが来たときには、こんなに遅くまで活動をしていたのか、と驚きました。寮には門限があって、夜になったら一斉に消灯してみんな寝てしまうものだと勝手なイメージを持っていたからです。ほーちゃんは勤勉な人を体現化したような人だと思います。

< 2 回目のミーティング >

進歩報告をする 2 回目の報告では、皆さんの交流の様子が伺えました。プレゼンテーションを作っている人もいてとてもわかりやすかったです。私たちは、二人で共有し編集していたドキュメントを使って発表しました。ほーちゃんが中国語で説明してくれたり、他のグループの人や先生方もアドバイスをくれたりと、これからのプロジェクトを進めるための沢山のアイデアを得ることができました。初めはほーちゃんの学生生活と私の学生生活を比較したビデオを作ろうと考えていましたが、同じようなことを考えていたグループがあったので、違いを出すために、お互いの生活に近づけてまるで 2 人の場所を交換したかのようなビデオを作ろうということになりました。

また、2 回目のミーティングの前半の司会をさせて貰ったのですが、最初はグループのメンバーの名前を呼びあげることにできなかったのも、発表している途中に、セリフの



とりあえず、何気なく送っている毎日の大学生活を写真で記録することにしました。

文章を作りました。理解ができないことや間違っているところも、先生方のサポートにより乗り越えることができました。司会をする、という些細なことでも、中国語が上手でない私にとっては大きな経験でありやりがいを感じることができました。同時に、言語は理解できないと辛いんだなと痛感した回でした。

< 3 回目のミーティングまで >

2 回目のミーティングから先生との個別ミーティングまでの間に進歩はほとんどありませんでした。相手の生活に近づけることは難しく、なかなか進まなかったのが事実です。私はサッカーをしたり、中華料理を食べたり図書館で勉強したりと、ほーちゃんの普段していることを撮れば良かっただけなのですが、いざとなるとサッカーボールもなく、サッカーをする場所もなく…というふうに、なかなか簡単にできることはありませんでした。生活は人それぞれで、その人の生活を真似することは難しいと実感しました。私たちの人生は今までの積み重ねであり、その人の人格や習慣というのすぐに習得できないのだと思います。また、チャットの頻度も減っていたように思います。お互いに忙しくなってきたのは事実ですが、離れていると関係を保つのは難しいなと思いました。

< 3 回目のミーティング >

3 回目の個別ミーティングで、ほーちゃんの味わっていた学校でオンライン会議をすることの不便さを味わうことになります。図書館では話せないの、学科の建物である 14 号館の教室で会議に参加しようとしていました。教室に誰もいなくてラッキーと思っていると、守衛さんが入ってきて「授業がもうないのでもう閉めますよ」と言われたので、仕方なくロビーで受けることにしました。人通りが多く、やりにくかったのを覚えています。ほーちゃんもこのミーティングを公共の場で受けていて、「あ、おんなじ環境だ!」と思っていました。

< 4 回目のミーティングまで >

最終のミーティングは、私たちの成果発表会です。しかしこの期間はほーちゃんの試験期間でなかなか連絡が取れず進歩がありませんでした。成果物は満足のいくものができなかったです。ミーティングには阿部先輩も傍聴として参加していて、最初中国語で話していたアドバイスを私のためにもう一度日本語で説明してくださったり、ミーティングの後もおすすめの中国語学習法を共有してくださったりしました。鶴海先輩に阿部先輩の話をしたら、「あー、医学部で台湾に研修に行った人だね。」とすぐにわかっていました。阿部先輩は中国関係の学科ではもう有名人なのでしょうか…。

< 4 回目のミーティング >

ほーちゃんが出席できないとの連絡があったので、私 1 人で発表することに大きな不安を感じていましたが、台本を作ったたくさん練習をしたので、無事に発表を終えることができました。また、途中からほーちゃんが来てくれて補足説明をしてくれました。みなさんの発表は動画が多く、ストーリー性のある阿部先輩と孫文さんの発表はとても素敵だったと思います。また、日本語の字幕がついていたのでわかりやすく内容をちゃんと理解することができました。

< 4 回のミーティングを終えて >

やり残した感情と中国語が十分に身につけていなかった悔しさが最も強く感じられました。その次に、また一人ほーちゃんという友人ができたことに喜びを感じました。私は、春に浙江大学、夏に南京大学にオンライン留学をしたので、中国にはたくさんのオンライン友達ができています。実際に中国に行って、または日本にきてもらって会える日を本当に楽しみにしています。

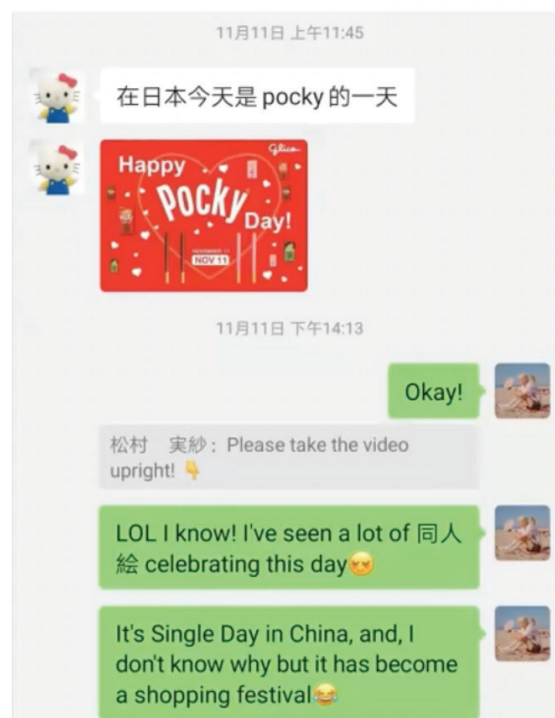
Someday we will laugh all night about our hardest time

撰稿：陈方媛

约两年前的世界尚未预料到这种状况的出现与延续，时间的绳索在那个寒冬落入了疫病的冰水里，浸泡成窒息般的缓慢延续到今日。那时的我还在打算着东奥的行程，怎堪想一切都成为了不切实际的空谈。但那时的我也不会想到，今天的我的指尖会通过云端，触及鲜活的东京日常。有如透过层霾的一束阳光，我闭塞而凝滞的生活突然间被点亮了。

在全球疫情的大背景下，初入人大校园的我幸运地参与了题为“鉴影度形”的人大 & 东大交流研修活动，得以在线上的会议室里，结识了这群可爱又个性鲜明的东大同学，其中就有我本次活动的搭档，来自教养学部工科的二年级生松村実紗同学，昵称 Miya。我们俩堪称是“一见钟情”，在初见面，即第一次汇报时，我就对她印象深刻，在资料册上她的名字后面写上了小小的“可爱”两字。后来组内交流时，她告诉我，在汇报中，她也觉得我很可爱……这大概也是她喊着“初音ミク”主动提出和我组队的原因吧。总之，我们的缘分就这么奇妙地开始了。

由于条件所限，微信成为了我们交流的主要方式。通信技术的巨手轻巧地将讯息与心声传达到海的彼岸，这可以说是信息时代的绮丽景观之一了。在不长不短的三周时间内，一条条载着文字、语音与图片的讯息，描绘出了我们对彼此的肖像画卷，也一点点拼凑出了最终作品的线索。由于是从零开始，我们决定先从基本的生活学习状况和兴趣爱好说起，在彼此熟络的基础上开展课题的选定与制作。只有先成为朋友，才能做出真正饱含心意的好作品。从清晨到夜晚，追



我们无所不聊，从学习生活到个人爱好，有时也会彼此吐槽，比如两国共通的消费主义陷阱“双十一”和“百奇日”。

赶着一小时的时差，我们从学习聊到课余，从运动聊到食物，对对方的个人以及校园生活都有了具体的了解。在过程中，我们感受到了种种奇妙的相似与有趣的差异，也体会到了两国文化异中有同的微妙张力，以及两人一些心有灵犀的默契。我们虽然国籍不同，身上却同时存在着两国的影子。我去过她的家乡奈良，她来过我的故土浙江；我兴味十足地自学着日语，她的二外选择了中文；我在人大餐厅吃着寿司与天妇罗，她在东大校园品味中华料理……我们就像在相异轨道上彼此靠近的两颗彗星，短暂相遇便曳出了炫目的光彩。最终，我们将主题确定为人大 & 东大校园生活差异，通过个体日常多方面的比较，折射出两校乃至两国的差别，达到以小见大的效果。

作品提案的诞生经历了一些波折。呈现形式从歌曲变成了 vlog，又因为时间与设备所限简化成了 plog。虽然形式有变，动静有别，但大体内容依然遵循了最初的设想，真实而细腻地展现了两人的生活轨迹与兴趣喜好，囊括了住宿方式、出行工具、饮食习惯、运动锻炼、课堂学习等方面。原本受一个音乐视频的启发，想要做出有互动感的画面，营造出一种在屏幕上会面交流的感觉，但由于形式的限制，只能通过照片中相呼应的小细节加以弥补。就算是这样也产生了一种天涯若比邻的氛围呢。作品的制作过程中，我们相互合作，共同进行头脑风暴，还用可爱的涂鸦画作充当脚本，在确定了几个场景后，奔赴校园的各个角落进行拍摄。同时我还学到了一招，能够更熟练地运用共享文档实现异地的小组合作。从各种意义上来说，这都是一段难忘的回忆，是一次遥隔千里的并肩旅行。

通过对比，我们也得出了一些有意思的结论。首先，两校的住宿方式截然不同。不止人大，中国的大学普遍为学生提供校内宿舍，而国外的大学则往往要求学生在校外自行租赁公寓。这也许和中国传统的集体主义观念有关。集体宿舍能够让人感受到家一般的温暖，而独立公寓则有更多自由的空间，两者各有千秋，但却实实在在地带来了第二个方面的不同——交通方式。在人大校园，我只需要一辆共享单车就可以在五分钟内到达教学楼（它也可以带你去其他任何地方）；而松村同学却要坐一个小时的电车才能到校。这样的上学路是我从小到大都未曾经历过的。此外，就运动而言，两人都是爱好者，我进入了学校的女足队每周训练，松村同学则保持着规律的健身。人大没有专业的健身房，锻炼的氛围也没有那么浓厚，这也许是我国的高校都应该加以改进的方面。关于上课，松村同学一般是半天网课、半天线下的安排，而我们基本没有网课，但在两校上课口罩都是必备品。如此种种，不一而足，这次的课题只展示了有限的方面，但我相信两校还有更多有意思的异同等待着我们在接下来的日子里去发现。

研修结束的日期早早到来，但我们会面的时刻却遥遥无期。此时此刻，Z 世代的我们都共同经历着这特殊的

一切，分担着人类的痛苦与悲伤，也齐心盼望着放晴的那一天。我们在大学校园里的脚步分隔却共振。浅浅一湾海并不能阻隔两国人的真情，疫情也不能。日本乐队 RADWIMPS 曾写过一首名为“Light the light”的歌献给在疫情下的中国过着不安生活的人们，抚慰人心的歌词与旋律真如黑夜里的一束光，温柔地驱散恐惧，带来希望，见证着中日两国的友情。有一句词曰“Someday we will laugh all night about our hardest times”，听来令人动容。是的，总有一天我们会在现实的世界中围坐一堂，坦然地谈起曾经的至暗时刻，笑声彻夜不息，再无泪水，再无歉疚。未来不会黯淡，因为我们知道会有彼此在身边。Miya 酱，我等着和你一起享用料理的那一天，记得不要点生鱼哦！

中国留学を夢見て

中国語を上達させなければならないと痛感しました。お互いを理解するためには共通言語が重要です。今回の4回のミーティングでは基本的に中国語が用いられました。内容の30%ほどしか理解することができず、とても苦痛な時間でした。どうして、日本にいる中国人とこんなにも仲良くできているのだろう、と考えたとき、私たちの間には共通言語が存在していることに気がつきました。Belleという友人とは、彼女の日本語は上手なので基本的に日本語で会話しています。Stephanieという友人は、彼女は日本語があまりできなくて英語ができるので、英語で会話をしています。中国語を全然使っていないじゃないかと、ツッコまれるかもしれませんが、中国語を前期教養課程を終えた今でも続けられているのは彼女たちのおかげです。彼女たちがいるからこそ、中国に興味を持ち続け、中国語の勉強がとても楽しくできています。今は、簡単なフレーズが言えたり、発音を中国人に褒めてもらえたりするくらいまで上達したので、これからも会議でディスカッションできる位まで上達できるように頑張ります。

また、人はそれぞれの全く違った人生を歩んでいることにも気付かされました。ほーちゃんの生活を真似しようとしたとき、朝自転車で教室に行くことも、公共の場所で勉強をすることも、サッカーをすることも、慣れていないことばかりで、私がそれらをしようとすると、自転車が必要だったり、ボールが必要だったり、ほーちゃんのいる環境に近づけるところから始めなければなりません。逆にいうと、私たちの人生はこれまでの行動の積み重ねであり、私が毎日ジムに行けているのもボディビル部に入ったからだし、朝勉強する習慣も受験生の時につけたもので、人それぞれの生活スタイルが確立されているんだと思います。

最後に私が中国の寮生活を体験してみたいということとその理由を述べようと思います。私はアパートに住んでいるので比較的自由度が高く、それはそれで楽しい生活を送れていますが、中国の寮生活もぜひ体験してみたいです。やはり、常に友達が周りにいることは、何事においてもモチベーションになると思うし、支え合うことができるからです。一人暮らしだと、つい部屋が散らかってしまったり、ダラダラしてしまったりしますが、寮生活で他の人の視線があると、自分を律することができると思います。また、ほーちゃんに学生寮の写真を送ってもらったのですがとても大きな建物でした。この建物の全部屋に大学生が住んでいるのかと思うととても楽しそうで羨ましくなっていました。東大にも寮がありますが、日本の習慣として、寮に入る人の割合は中国ほど高くないし、キャンパス内にないので、アパートのような感じなのではないかと思っています。四六時中、学生生活をキャンパスの中で送れると、大学のことにもっと集中したり、大学にもっと愛着が沸いたりする気がします。いつか中国の大学で寮生活を体験できる日が来ると嬉しいです。

(松村実紗)

关于 HOMIE 组合的二三事

我们的组合名取自各自姓名的一个音节，组合起来是“好哥们”的意思。是的，短短三周时间，我们已经成为了好伙伴。

在交流的过程中，我最直观的感受就是愉悦。我和 Miya 酱年龄相仿，爱好相似，很聊得来，就像完全没有压力的朋友之间的随性谈话。虽然未熟悉过彼此，但总能猜到对方的心思，这让我们的聊天变得十分顺利。要是所有的小组合作都能这般愉快，我一定会成为组队的积极拥护者。

但我们的合作也不是完美的，还有许多地方可以改进。比如语言，英语都是我们的第二语言，因此在表情达意上可能存在着不充分的问题，如果能够畅快地用中文或日文交流就更好了。比如形式，期中周的我们彼此都忙于考试，所以较少运用语音或视频等方式进行沟通，而是单纯地在微信上发着消息，多少会影响进程的效率。感叹于别组作品或精美或高级的质感，我们也在反思自己作品的不足之处。

但是，总而言之，这对我来说是一次新奇而快乐的体验。有困惑，有教训，但更多的是收获。我收获了珍贵的友情，也收获了更广的人生视角。因为这次研修，我在今后的生活里会从新的角度考察校园生活，更加关注国际文化的差异，锻炼自己的跨文化交际能力，努力将自己的生活乃至本国的文化向世界加以呈现。可以说，这一切对我产生了深远的影响，在我的人生中留下了烙印。

HOMIE 的友情还在继续，来日方长，请多指教～！

(陈方媛)

ススキのように

構成・石川禎子

秋の風物詩、ススキ。花言葉は「活力」と「心が通じ合う」だ。

私はまさにこの秋、深思北京においてススキのような関係の友人を得た。

「コロナ禍の最中にできる国際研修があるんだ。」これは UTAS で深思北京のプログラムを見かけた時の第一印象だった。例年は東京大学の学生が実際に北京を訪れて故宮を観光したり人民大学の教室で中国文化の授業を受けたりと現地に身を置いて中国を体験しつつ様々な人と交流する深思北京のプログラムなのだが、コロナ禍の関係で去年からオンラインでの実施となった。申し込んだ当初は、現地へ赴くことができないことが非常に残念に感じられ、オンラインでの交流で十分に人民大学側の学生と仲良くなれるかに不安を感じたけれども、交流が開始して間もなくこの憂慮は打ち砕かれた。

私たち東大生は人民大学生とペアやグループを組んで主にそのメンバー同士でコミュニケーションを取ったが、最初は何を話したらいいかわからず当たり障りない最終課題の動画内容を議論していた私たちは、たちまち WeChat でのショートメッセージのやり取りや Zoom でいつまでも話題が尽きない仲になった。私のチームメイトの劉暢と王友蓮は明るくてかわいらしい女の子たち、野仲くんは少々恥ずかしがり屋でありつつポジティブな男の子で、私たちはいつも笑っていた。知り合ってまだ短い時間であるにもかかわらず、私たちは気の置けない関係となった。まるで旧友のようだ。このかけがえのない友情は当然これからも続くが、交流プログラムが終了した今、ここまでの 3 週間を振り返ってみよう。

最初に人民大学生たちと顔を合わせたのは初回交流会だった。自分の部屋などそれぞれ別の場所から参加していてなんだか緊張した面持ちの東大生とは違い、人民大学生らは大学の一室に集まっていて和気あいあいとしていた。その和やかな雰囲気のおかげで、最初は緊張気味だった私たち東大生は自己紹介が進むにつれていつの間にか心がほぐれていった。

東大生たちは渾身の作品を披露してくれた。台湾で病院実習を行った経験を紹介してそこで楽しんだ数々の美食の写真を披露してくれた阿部さん、朝起きてから夜寝るまでの一日を写真に収めて私たちに日常生活を紹介してくれた松村さんなど、東大生側の個性あふれる自己紹介作品は彼らの人となりを教えてくれた。私の自己紹介作品は愛馬とのムービーだった。馬術部員の私にとって馬との生活はかけがえのないものなので、愛馬との日々を自己紹介のテーマに選んだ。まず馬房の前に立って趣味である乗馬の事や馬術部の活動などを簡単に紹介してから馬房に入って愛馬の顔を持ち上げてその子への愛を語った自己紹介の動画なのだが、みんなの関心を想像以上に引けていたように感じられた。動画が流れ始めると人民大生たちは口々に私の中国語が天津弁に東北弁が混じっているのではないかと（私は天津で 1 年間小学校生活を送っており、そして祖父祖母は東北の出身だ）と話し始め、私の愛馬がフレームに収まると歓声をあげながら馬の事を話し、そして物珍しそうに私の愛馬を眺めた。彼らの明るい雰囲気のおかげで、自己紹

介動画を流し始めた時に戻ってきた緊張は跡形もなく消え去り、早くみんなと直接会話したいという期待にあふれた。

人民大生側の自己紹介も東大生と同じように個性あふれるもので、のちに私のチームメイトとなった劉暢と王友蓮の自己紹介資料はとても印象的だった。劉暢は景山公園での観光を Plog 形式で紹介してくれた。入園前の景色から入園後の建物や草花、道端で丸まってぐっすり眠っている猫の写真など、観光者の視点から撮られた写真の数が並び、彼女が逐一解説してくれたので、まるで彼女と一緒に秋の小旅行を楽しんでいる気分となった。そして彼女が写真に「秋風が耳をかすめる」や「今日の風は秋の便りを届けてくれた」などの文をつけていた。それらの詩的な表現は彼女が文学少女だということを教えてくれて、私は彼女に惹かれた。一方、王友蓮の自己紹介資料は比較的シンプルだ(プログラムの応募締め切り2時間前にその存在を知ったので資料作成に十分な時間を取れなかったそうだが)、劉暢のものと同様に彼女がどのような人であるかがよくわかるものだった。彼女は日本語が第二外国語とのことで、私たちに資料を見せながら日本語でその説明を行った。彼女の写真は夕焼けに染まる人民大学から眺めた空と銀杏の木のものだ。5時半ころに授業が終わると、彼女は夕食を済ませて友人と夕日の元で散歩してからまた自習に戻るといふ。この時点ではリラックスタイムを取りつつも勉強に奮闘するまじめな学生という印象だったが、2枚目の銀杏の木の写真の紹介に進むと、彼女は急に気恥ずかしそうに言った。「これ、資料作った後に気が付いたんだけど、銀杏じゃないのよ。」と。人民大生の方では笑いが起こり、私もそのかわいらしい間違いについ笑みがこぼれた。その木の葉っぱが真っ黄色だったから銀杏だと思い込んでいたらしい。生真面目そうでありながらおちょこちよいの彼女にギャップ萌えをしてしまった。

実際にチームを組んでから、彼女たちはさらに色々な顔を見せてくれた。私たちは Wechat という LINE のようなチャットアプリを使って連絡を取り合ったが、初めての会話が文字だったにもかかわらず数日以内に打ち解けられたのは私たちがデジタルネイティブである以外に彼女たちが元気な女の子たちであったおかげだ。

まず、私は劉暢、王友蓮のそれぞれと個人チャットで挨拶をした。私が1年間の小学校生活を過ごした天津は劉暢の出身地であったので、日本でも初対面の人ととりあえず地元の話をすると同じように私たちは当たり障りのない話題からチャットを始めた。少々打ち解けあったところで彼女は授業に向い、その後のやり取りはすべてグループチャットで行ったので、個人チャットでのやり取りは天津ネタで尽きている。一方、王友蓮との最初の会話はお互い時間があったのもあってよく打ち解けあえた。彼女は私の馬術部の活動に彼女は非常に興味を持ってくれて、馬を撫でているときに私の目が輝いていたことが印象に残っていると教えてくれた。その後会話はお互いの共通の趣味の旅行に移り、彼女が北京西山森林公園や明十三陵に観光に行きたい話や、私が数か月前に行った箱根旅行の話で盛り上がった。そして、女子の一人旅事情の日中の差やフェミニズムまでを語り合った。日本時間がいつのまにか零時を回ったことに、私は王友蓮から「時差のこと忘れてた!日本ではもうかなり遅い時間だよね?」と言われるまで微塵も気が付かなかった。初回のやり取りはここで終了し、以後私たちは東大生の野仲くんを含む4人のグループチャットで交流をするようになった。

私たちは毎日のようにグループ内でおしゃべりを楽しんだが、チャット履歴を見返すと深思北京の最終作品の作成案についてほぼ話していないのではないかと思えるくらいに雑談の分量が多い。私たちは日常生活での出来事を分かち合った。私たちは同世代の難関大学生なので共通点が多いが、日中の気候や習慣の違いも会話のネタとなって非常に新鮮な日々を過ごした。私は必修の国際政治の英語論文読解に苦しめられていること、劉暢は中間課題の英語論文作成のこと、王友蓮は単位がかかっている論文作成のことに関する嘆きをグループに投げて傷のなめあいをしつつアイデアやアドバイスをしあった。そのような勉強ネタのほか、劉暢は北京の初雪で作った少々不細工な雪だるまの写真を自慢げに送ってくれて、王友蓮は体育で卓球を楽しんだ話をしてくれた。私が中国でインスタグラムのような役割を担っている「小红书」(RED)で日々情報収集をしていて、中国のドラマや漢服が大好きであることも話のネタとなった。このような日常的なおしゃべりではいつも笑みがこぼ

れ、よく気持ちが高ぶって「コロナが収まったら本当に会わなきゃね」という話になる。知り合って間もないはずなのにずっと前から仲良く過ごしているかのような居心地の良さから、私たちはチーム名を「“四” 曾相识 (中国語の“似曾相识”と同音で、以前から知り合っているようだという意味)」に決めた。いつかこのチームで実際に会って観光を楽しみ、私も劉暢も好きな漢服をみんなで着て写真を撮りたい。



最終発表 vlog エンディングクレジット by 「両京一休日」製作委員会 (笑)

雑談を楽しむ合間に、私たちは作品の方向性を決めるために 11 月の第 2 週に zoom ミーティングを開くことを決めた。私たちのチームは 4 人班で、それぞれをバランスよく紹介するには日中の同じ時間帯にそれぞれがしていることを同時にムービーに映して対比する形式で私たちの日常生活の 1 日を紹介するのが面白そうだという意見にまとまった。そして対比するに終わらず、例えば人民大学のテニスコートで劉暢や王友蓮がスマッシュを撃つと今度は東大のテニスコートで私が野仲くんがそれを打ち返すというような、別の空間にしながら同じことを楽しんでいるというような作りをしてみんなが繋がっている雰囲気を出そうというのだ。しかし残念ながら、全体会合でこのアイデアを紹介したところ別の班も東大側と人民大側がまるで一つの空間にいるかのように演出する形式を思いついていた。私たちは慌ててその班と自分たちの班を差別化するために第 2 回 Zoom ミーティングを開いた。現実的な問題として、東大生と人民大生が同じ空間にいるかのようにムービーを編集するのは技術的に問題があることを考慮して、私たちはチームメイトそれぞれの生活から特徴的なものを切り取って時系列順にならべて 1 日にすることにした。この内容で先生たちに相談したところ問題はなかったため、私たちは準備を進めた。

最終作品の内容は、東大と人民大学の双方にある銀杏

の木から始まり、私の乗馬の姿、王友蓮が教室で中国語を勉強している姿、劉暢がカフェで読書をする姿、野仲くんがゴルフの打ちっぱなしを楽しむ姿など、私たちにとっての大切な日常の時間で構成されている。そして、たまたま作品提出前日に私が中国から取り寄せた漢服が届いたので、それを着て散歩する姿も登場する。編集を担当したのは劉暢だが、映画が終了する際に流れるキャストリストのように私たちチームメイトの名前を流したのちに、「終わりだと思った? いや、私たちの美女をお見せします。」と字幕が出てから私の漢服姿が音楽付きで登場したのは嬉恥ずかしい気持ちでいっぱいになり、劉暢の遊び心満載のセンスに感心した。



上：中間発表スライド；下：最終発表 vlog オープニングクレジット

プログラムが終了した今でも私たちはしょっちゅう連絡を取り合って、美食や新しく買った服の写真を見せあって褒めあい、読解に苦労している論文の内容を議論したりレジメの内容を詰めたりと、私生活から勉強の内容までを共有する。コロナ禍がまだまだ続くように思われるので実際に会うのは当分の間難しいと思われるが、私たちは必ず会うことを誓った。火鍋を共に突っつきながら談笑し、一緒に漢服を着て写真を取れたらどれだけ楽しいのだろうか。それはきっと笑い声の絶えない時間となる。この秋に咲いたススキは今後も未永く私たちの中に咲き続けるだろう。

“两京一假日”——一个性又共性的一天

撰稿：王友莲

本次活动中我们四个人组成一队，在网上交流时，由于一些生活习惯和学校生活上的相似，常常会感到对方像是已认识许久的老友，而我们谐音“似曾相识”的四人小组组名“四曾相识”就因此而来。

首先要非常感谢本次活动以及在活动中给予我们引导、支持和帮助的所有老师同学们。本次活动给予了我们一个平台，让我们去更好地交流与了解人大与东大的同学们在 Z 世代的背景下的生活、学校以及社会文化的异同。在交流过程中，鲜活而真实的同学与事例让我们了解到更细节性的个人生活和社会文化，同时也让我们在联系中更好地梳理和认识自己的生活和社会文化。

在第一次的线上见面会时，东京大学的同学大都操着一口流利的中文，神采奕奕地介绍着他们与中国与汉语的缘分经历。我们人大的同学都很惊讶，一方面惊讶于同学们的口音之纯正甚至听不出来其母语是日语，另一方面是惊讶于原来东大的同学早已与中国有了很多次的相遇。

分好小组后，我们两位人大和两位东大同学组成的四人小组，在人数上占据着一些优势，得益于此，我们的沟通群里从来不会冷场。我们不仅在微信群里文字沟通，也会在视频软件 Zoom 上进行视频连线进行更高效的交流。

在确定小组汇报主题的时候，我们确定了从宿舍生活、体育运动、社团活动、上课一日等等众多选题，到最后才选定了“两京一假日”的视频拍摄主题。恰恰是在复杂的选题的过程中，我们得以机会从生活的各个方面与大家进行了深入细致的交流。

在讨论第一个选题“宿舍生活”时，东京大学的同学们介绍到大多数的学生不会入住到学校宿舍内，而是会选择租房或是回家住，这一点与中国的大部分大学生情况恰好相反，就比如人大的学生基本都会选择住学校宿舍。如果没有学校宿舍，租房提供了个人空间，也一定程度上锻炼了自己的独立能力，但是租房的费用以及每天花在通勤上的时间精力也会相对变多。在住宿问题上原来我们之间存在着这样大的差异呢！而在讨论“体育运动和社团活动”主题时，东大的同学问到是否在中国的大学里的社团活动并不是很多，我们告诉他们，实际上是中国一些中学可能在社团生活方面不是特别丰富，但在大学期间各个学校的社团活动往往不拘一格，多姿多彩，数量种类也都非常多，比如人大校园里就有的包括学习日语和日本文化的樱花社、用于体育锻炼的轮滑社、高尔夫社等各类活动社团。东大的同学听了也表示很想加入轮滑社学习和玩耍。从这一点看来，唯有我们多多交流沟通，才能让大家互相了解到各自真实的校园生活。而关于“上课一日”的选题，在中期汇报会上，伊藤老师听到我们的选题后给我们提供了一些指导，告诉我们这个选题可能类似于记流水账，无法看出来每个同学生活中的侧重点。这一主题虽然是以时间线为线索但是没有突出我们各自的生活，表达出来可能会显得大家的生活很模式化。我们听取了伊藤老师的指导，保留了以时间线为线索，但是以拼接的方式，把四位同学除上课以外的，在日常的假期或是闲暇时光喜欢做的事连接起来拍摄成一天，并取名“两京一假日”。正如其名字一样，我们希望能通过我们拍摄的作品能够展示北京和东京学生在平常的一天假期内所会做的不同



“四”曾相识全员集结

的事情，借此来介绍自己同时也能了解对方的生活。

选定主题后，便开始了视频的拍摄制作环节，这也就涉及到了一些细节性的信息。东大的同学向我们展示了他们缤纷多彩的娱乐方式。比如，石川同学非常喜欢骑马，早上的时候就会去社团练习骑马，也会去参加障碍赛等一些赛马比赛；野中同学则会选择下午打高尔夫来锻炼和放松，而在人大也有类似的高尔夫社团；此外他们也会在空余时间选择看剧来放松，比如中国的古装剧《甄嬛传》就很受欢迎。我们两名人大的同学则选取了乒乓球运动，作为中国国球，乒乓球在人大的体育课程中也是大家的一项必备技能，所以会有很多同学在空闲时间预约好场地来提升球技。此外我们也选取了阅读文学作品以及学习语言的生活片段作为拍摄素材。人大也开设了很多关于日语学习和日本文化的课程，我们小组的两名人大的同学也都选了有关的课程，课余时间也会把它当做一种兴趣来继续学习充实自己。这些体育运动和学习充电的小片段就这样被我们摘取出来，在我们沟通后，将四个

人的活动按照时间点来串联组合成一天的生活，这种形式内容体现出我们个体差异性的同时也展现了我们之间的联系。

非常高兴通过这次活动学习到了很多知识也收获了很多朋友，大家都在尊重对方生活和文化的基础上进行交流，所以我们的沟通与作品的制作过程都非常的愉快和高效。整个活动的进行过程也是我们之间不断培养感情的过程，活动接近尾声时屏幕那端的早已不再仅仅是一个“东京大学同学”符号下的对象，而是在我们互相沟通交流后变得生动起来的个体。共同生活在 Z 世代下的我们，自然而然地在生活习惯和学习上有着许多相同点，但是在不同社会文化的影响下我们之间的我们也都带有自己的独特性，而这个活动就是给予了我们这样的平台可以针对这种异同点沟通探索。

最后，再次感谢参与举办本次活动的各位老师和同学们，给我们搭建了一个互相交流沟通的平台，也让参与活动的我们收获满满。

“两京一假日”的提出与实现

——深入生活，寻找异同

撰稿：刘畅

“两京一假日”主题的提出和最终作品的完成，是一个不易的过程：其中经过了三次集中的小组内视频会议讨论以及数不胜数的微信群聊讨论，经过了漫长而艰难的素材收集和后续剪辑，最终形成了成果。接下来是对创作思路提出、作品制作全过程的简要回顾，也当做这次交流研修的纪念：

我们最初的想法是一个镜头多个生活，也就是同时记录中国和日本的平凡一天，镜头会涉及上学、宿舍、校园风景、当地美食等等，但是这个方案在进行成果汇报时，显示出了它过于宽泛、缺少重点且和别的组重复的问题，我们又进行了第二次和第三次讨论，决定选取较有特色的部分作为 VLOG 的素材，由于这些呈现在视频中的事件大多发生在假日，所以我们确定了以“假日”为主题。

虽然这个简短的简介听起来有些无趣，但讨论和制作的过程其实是充满乐趣的，以至于我们最后调侃最后的 VLOG 作品被我们四个人拍成了喜剧，其实在这一过程中也投入了大量的心思和精力，制作过程中会有双方的拍摄沟通，具体的镜头拍摄也要考虑双方的互动和创意性的提升，最后的剪辑和配乐添加更要考虑全局，环环相扣的制作过程其实是很考验整个小组的合作能力的。

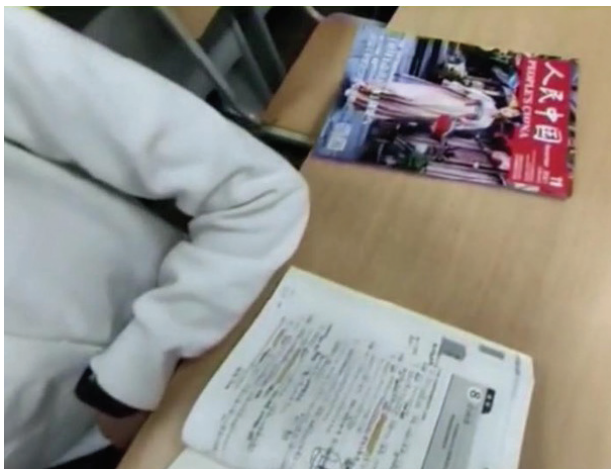
假日是一个有着美好意蕴的词汇，在一般的解释中，假日通常代表着休憩、放松，那么在稍显繁重的学业之外，记录当代中日两国大学生的假期生活，似乎更能显示出学业之外最为真实的生活状态，呈现最为日常的喜怒哀乐。此外，我们特意选取了比较有特色的部分来构成整个 VLOG，比如将日本的淘宝购物与中国的国际购物相联系、中国电视剧在日本与日本文学在中国相联系等，这种双向互动我认为更能展现“对话交流”的主题。其实这本身也是一个了解和学习的过程，我个人认为某种意义上每一位组内的同学对于其他同学来说都是一本活的“百科全书”，当我们心中有好奇或者疑问时，我们会实时“查阅”这几本百科全书，获得我们想要的答案。比如说有关于中日大学住宿问题的研讨，就可以从四本“百科全书”中获得启示和答案。假日也展示了更加丰富的个人生活，各类社团活动、体育锻炼、兴趣爱好会在假日得到更加完整的呈现，它可以作为一个生活的窗口，激发我们持续观察的好奇心和热情感，也能达到“以小见大”的目的：通过这短短的一天，你发现了什么？两校学生的假期当然是存在差异的，这种差异是什么，又从



落实到文字的讨论过程，对于语言学习来说是一个不错的锻炼。

何而来？我们希望一个短短的 VLOG 可以成为一个开关，可以打开中日大学生活的“万花筒”。

在细节上，有一些设计在展示的时候没有来得及说明：拍摄学习日语并阅读杂志的片段时，这本杂志是著名的《人民中国》，《人民中国》是新中国成立之后进入到日本最有影响力的杂志之一，见证了中日之间长久的文化沟通，如今《人民中国》也成为了众多中国日语学习者了解日本的窗口，这种双向的文化互动就体现在了我们的成果中。我们以东京大学的银杏树和人民的大学的银杏树作为 VLOG 的开头，以人大校园中代表中日友谊的樱花树作为结尾，也是为了彰显友谊长存的主题。岩井俊二是在中国非常具有影响力的作家和导演，所以我们在拍摄读书片段时，也是选取了他的书籍。这些细节虽然可能不会被观者特别注意，但都经过了这些创造者的一番考量，对我们来说这是很宝贵的创作经历。



也许最让观众感到有意思的就是我们的花絮片段，其实当初加上这个花絮片段只是因为在中国的两个小组成员互相拍摄，感觉这个过程也非常有意思，然后灵机一动想到了最后做一个花絮合集的方法。其实后来我们在讨论中也有说到，其实这个拍摄的过程记录比最后经过艺术加工的成品 VLOG 更加珍贵，许多年后，也许我们会忘记拍摄出来的成果，但是绝对不会忘记这个有些艰辛又充满乐趣的拍摄加工过程，正如泰戈尔的一句诗：“天空中没留下鸟的痕迹，但我已飞过。”过程中的快乐以及双方同学形成的深厚友谊，是比成果更加珍贵的收获。

在活动之外，组内的四位同学已经成为了好朋友。专业是国际关系的石川禎子同学和我本人形成了“学术伙伴”关系，我们在当下以及以后的学习中会互相交流学习中的困惑、经验；我们会分享日常生活中的大大小小的事情，在这些事情中感受对方的生活，也感受不同文化的多样性，这不能不称之为是独特的经历；交流所带来的快乐也成为了繁重学业压力下难得的放松，也许之前的我们难以想象，从未实地见过面的两国人会因为一次线上的交流成为好友，但是这次的经历告诉我们：空间的阻隔并不是绝对的，只要观念相通、互相理解，也能结交真诚的朋友，

我们小组的组名经过商议定为“‘四’曾相识”，运用了中文中的谐音，其实是表现组内是四位成员，四个成员虽然未曾见过却一见如故。其实这非常契合我们小组的特点，我们互相熟悉的速度非常快，交流也非常顺畅，合作中各司其职、尽己所能，发挥了合作的最高价值；我们每个人都对组内其他同学的成长经历、生活内容感兴趣，所以彼此互相了解、尊重，并且永葆好奇心。在视频制作期间，四位同学的课业压力都非常大，但是每个人都高质量地完成了自己的任务。最后感谢组内的其他三位同学，我想对他们说：正是由于你们的努力，才让我们的交流如此成功，才让我们未曾见过却“一见如故”。

上：日语综合月刊《人民中国》向日本介绍了多样的中国，也是众多中国日语学习者了解日本的窗口，见证了中日之间长久的文化沟通。

下：两校的银杏景色被我们运用在了 vlog 开头中。

自己定義

私は中国で小学校の１年間を過ごしたこともあって中国人や中国の文化には親しみを持っているが、知り合いの中国人はほとんどが日本に來ている中国人留学生で、なかなか今中国に身を置いている中国人と知り合う機会がなかった。そのため、深思北京のプログラムで同世代の中国人の友人と知り合うことができたのは自分にとって新鮮で貴重な体験となった。私自身は自分のアイデンティティを中国と日本の中間に位置すると認識しているが、今回の交流のおかげでその位置づけを少々明確化できたように思われる。中国と日本の真ん中より少々中国寄りだ。

日本人とのやり取りは基本的に LINE で、私は基本的に携帯電話を開いて通知があればその場で返信をするが、日本の友人たちから返信が来るのは基本的に 2 時間後（ひどいときは 1 日以上後）だ。私はそのペースの遅さがあまり理解できないのだが、プログラムでのチームメイトはいわゆる“秒回（秒で返信する）”タイプの方が多かった。そのようなハイペースのやり取りが心地よくて、私もチームメイトも WeChat を Twitter のような感覚で使って気軽に会話を楽しんでいたのかも知れない。そしてやり取りの心地よさに加えて、私たちのチームメンバーはとてもやさしい。「美人だね」、「イケメンだね」などの外面から「頭いいね」や「素直で優しいね」などの内面まで、お互いの素敵な点を目ざとく見つけて褒めあうのは常態だと言える。そして靖国神社のような日中間のデリケートな話題でも感情的にはならず、お互いの国内情勢を冷静に分析したうえで率直に意見を言い合える。しかも誰も互いの意見を否定せずに尊重する姿勢でいるのだ。このような環境の中で、私は自分の感情や思いを素直に表現することができて非常に居心地のいい時間を過ごしている。かねてより感じていたことだが、日本人は比較的婉曲的な表現を好んでいて自分よりも相手の気持ちを優先するなどして自分の考えを言わないことが割と多い一方、中国人は日本人よりも直接的な表現を好み、相手の気持ちも考えつつ自分の考えをしっかり言う傾向があると思われる。私は無意識のうちにでも日本語を話すとき、中国語を話すときでそれぞれの環境に合わせて話し方を変えているのかもしれない。日本語を話す際は自分の感情をあまりあらわにせず、中国語を話すときはぐっと感情表現が豊かになるのだ。だから中国語を話しているときは気持ちが楽に感じられる。やはり私は中国語が好きだと実感する。感情的には日本も中国も大好きな国で、これからも双方の良さを発見していきたいが、私にとっては中国の方が多少は相性がいいのかもしれない。私のアイデンティティは日本と中国の中間地点から少々中国寄りなのだろう。

（石川禎子）

“两京一假日”——学习之旅

非常幸运能够参加到这次活动中来，举办这次活动的老师们在整个活动的过程中都无微不至地给予我们指导和关怀，让我体会到了远远超过活动本身所带给我的温暖和收获。在这里向老师道一句：老师们你们辛苦了！

同时，很荣幸能够和其他三位同学一起组成一个四人小组，得益于此，我们能够从更多的话题和更多的个体身上来进行选题和作品制作，每位同学都非常乐于沟通和交流，因此也让我们的交流氛围变得非常愉快又火热，能够介绍自己的同时又了解对方。

此外，其他优秀的小组也让我学习到很多，他们对待问题的认真态度以及高水准的作品制作也都是我们学习的榜样。

通过这次活动学习到了很多知识的同时也收获了很多朋友，大家都在尊重对方生活和文化的基础上进行交流，所以我们的沟通与作品的制作过程都非常的愉快和高效。整个活动的进行过程也是我们之间不断培养感情的过程，活动接近尾声时屏幕那端的早已不再仅仅是一个“东京大学同学”符号下的对象，而是在我们互相沟通交流后变得生动起来的个体。共同生活在 Z 世代下的我们，自然而然地在生活习惯和学习上有着许多相同点，但是在不同社会文化的影响下我们之间的我们都带有自己的独特性，而这个活动就是给予了我们这样的平台可以针对这种异同点沟通探索。

最后，再次感谢参与举办本次活动的各位老师和同学们，给我们搭建了一个互相交流沟通的平台，也让参与活动的我们收获满满。

（王友莲）

由点到面：别开生面的线上交流经历

我心中的日本大学生是什么样子的？在参与这次线上交流活动之前，我其实无法给出自己的答案：因为从未接触过日本同学，他们给我的印象总是模糊的，甚至是说神秘的。和一般的中国民众一样，我了解日本及其国民的主要方式是网络以及报刊、书籍，我在进入大学之后也选修了《当代中日关系》课程。虽然现在的信息交流十分便捷，但是中国国内了解到的有关日本的信息仍然聚焦于两国关系、经济状况、社会要闻等时政大事上，中国国内民众了解到日本民众日常生活的途径依然较少，更不要说对于日本大学生的专门观察了。日本著名的“工匠精神”总给人一种严肃的印象，而日本的代表文化比如动漫等似乎又显得十分活泼，真正的日本和日本同龄人到底是怎样的？这次的线上交流给了我一个机会去探寻这个问题。

可以说我、友莲和石川禎子、野中智贵同学的交流是从一个又一个“点”出发的，我们常常以单个的问题串联起整个交流，我们对话的模式大概是这样的：提问日本是否存在像淘宝一样的网上购物平台，由此就可以引出两国之间购物方式、习惯的差异问题乃至两国之间的经济贸易往来；由两校之间的社团活动，引发了对于校园生活内多个板块的全面探讨。我们常常说：“诶，你那里有没有……”然后双方会回答：“我这里……，那你们那里呢？”以此类推，顺畅的交流就形成了，我们的三次视频会议讨论都进行得非常愉快，大家都对异国的生活有了更加准确深刻的理解。

在交流的过程中，我们其实是以聊天的形式进行的，虽说是为了最后的报告展示筹备、讨论，但绝不是为了讨论而讨论。我个人觉得我们四个人的组合可以说是“萍水相逢”却“一见如故”，我惊奇地发现原来有着不同的国别、生活背景的人，竟然有着不少相似点，所以互相了解的愿望就更加强烈了。相似点让人感到亲切，不同点让人感到好奇，一个又一个异同点的出现和研讨，都是这次研修带给我最宝贵的收获。

在我最初的设想中，和日本同学进行交流不是一件容易的事，因为我自己的日语水平远没有达到口头交流的程度，在这里要特别感谢小组的“翻译天使”石川禎子同学，她优秀的中文和翻译能力，为我们双方的沟通交流搭起了桥梁，也激励了我继续学习日语。此外，在与组外的各位同学交流时，虽然会较多地使用英语，但是交流上也几乎没有什么障碍，这是很令人惊喜的。

其实在这次活动中，最令我惊讶的是一个细节，石川同学和松村同学都知道来自于中国的APP小红书，我原本以为国内的这类软件适用人群仅限于中国大众，没想到竟然在日本也有它的身影，由此可见当下国际交流的范围之广。松村同学还在我的推荐下下载了黄油相机这个软件，不知道她现在探索到什么级别了？

我个人对于古代建筑非常感兴趣，在北京的世界公园里见到过一对一复制的日本京都宫殿，现在北京的市级公园逛了个差不多，也很想一睹日本的古代宫殿建筑的风采，希望疫情结束之后能有机会实地感受一下吧！汉服控石川同学一大愿望是到故宫里；来拍一组汉服照，我的愿望是可以看一看日本古建筑，这也算是双向的愿望了。

最后，我认为这次活动的结束并不是交流的结束，在汇报会过后，我们小组的内部仍然进行着个人生活的分享以及学习上的互相帮助，这次活动为我们搭建起了一个互相熟悉的平台，作为一次别开生面的线上交流，也会成为友谊的新起点。

(刘畅)

04. 冬日祭

【研修記事】

オンライン交流による日常時間の共有
冬日来信

阿部祥拓 53
孙文 56

【研修感想】

オンライン交流の良さと限界に触れて
望向他者的想象

阿部祥拓 58
孙文 59

オンライン交流による日常時間の共有

構成・阿部祥拓

新型コロナウイルスが始まる前の「深思北京」は毎年秋に行われ、後期課程の学生を中心とする10名ほどの学生が北京に派遣されて現地の人たちと1週間ほどの交流をしておりました。私の知っている先輩や友人でも何人かの学生がこのプログラムに参加しており、とても充実した1週間を過ごすことができたという話をいつも聞いていたので、自分もぜひ機会があれば参加してみたいと思っていました。しかし、いざ後期課程に進んでみるとすでに学期が始まっている11月に1週間日本を離れることは自分の専門のカリキュラムとの兼ね合いでとても難しく、自分はこの活動に参加することなく卒業するのだろうとあきらめていました。そんな私にとって、新型コロナウイルスの影響で中国渡航が不可能になり、主に放課後の時間を使ってオンラインの交流活動をするという今年の内容は、自分でも物理的に参加できる方式になって非常にうれしかったことを今でも覚えています。初日にそれぞれの学生が中国語や英語、日本語で個性豊かな自己紹介を行った後に学生同士がグループを作り、いよいよ今回の交流活動が本格的にスタートしました。中国の学生たちはおそらく日本のことをたくさん知りたいと思っているのではないかと考えて、交流活動中はなるべく日本にいた時期の自分の生活について語るようにしましたが、この最初の自己紹介だけは自分の4～5回に及ぶ台湾渡航歴について語りました。私は台湾に数か月単位の留学をしたこともあり、自分の話す中国語にはいくらかの台湾訛が入っている（と自分では思っている）ので、自分を語るうえで台湾のことについて一切話さないのはさすがに

不可能だと思ったからです。

私たちのグループでは主に微信を使っていろいろな話をしました。最終発表のキーワードなども意識して、我々は特に「食べ物」や「冬」について多くの会話を交わしました。お互いに自分の故郷や大学所在地の冬の様子を説明し、時には雪が降っている写真を相手に見せ、大学内の写真を送り合うようなことも行いました。食べ物に関しても適宜写真を送りながら、地元の料理や大学の食堂の料理を紹介しました。また、日本の食べ物の紹介はもちろん、私が行ったことのある南京や台北の食事や食べ物の様子と比較してみることもしました。その中でも特に印象に残っているのは、「烩面」という麺料理の話です。私は送られてきた写真を最初に見たとき、それが刀削麺だと思いましたが、両者は別の食べ物であり、「烩面」の方が長くて厚いということでした。相手の学生さんの故郷の名物料理だったので、そこから子供の頃の話にも話題が広がりました。また、焼き芋の話も同様に印象的でした。こちらは必ずしも地元の名物と言うことではなく、相手の学生さんが特に好きな食べ物であり、子供のころに家でよく焼いていたので紹介してくれたということのようです。サツマイモが焼き上がる様子、滴り落ちる甘い汁の様子まで丁寧に描写してくれたので、私も焼き芋が食べたくなったことを今でも覚えています。私は外国語を勉強するとき、あるいは外国の料理について調べるとき、食べてみないとなかなか印象に残らないということをいつも感じていました。もちろん味覚を使って料理を体験することの重要性は否定のしようがないものですが、今回の活動

のように具体的なエピソードを交えながら料理について語ることは、食べなくても自分の中にその外国の料理が印象深く入ってくるような感覚を覚えました。

さて、今回のオンライン国際交流が今までに参加した対面の国際交流と大きく違うと感じた点の一つとして特にここで取り上げたいのは、時間性的の問題です。現地に渡航して実施する場合は、メールの確認くらいはするにしても、基本的に活動参加中の1週間ほどは自分の時間やエネルギーなどをすべてその研修活動に費やすことになります。一方で、オンライン方式で、しかも週単位や月単位の交流を行う場合は、日常生活と並行して交流活動を行うという側面が強くなると思います。現地に行って短期集中で行う場合は、やはりその期間中は徹底的に活動に浸ることができるというメリットがあると思います。このように書くときと普段の生活と並行して交流を行うことがいい加減さというネガティブな側面をはらんでいるようにも感じられるのですが、私は必ずしもそうではないと思います。そもそも今回の活動はおおよそ同世代の学生の生活史、日常生活に焦点を当てています。そのため、お互いに日常生活と折り合いを付けながら都合の良い時間をやりくりして交流するこの形式は、相手が一日の中でいつ時間があって、いつ忙しいのか、週末の時間の使い方はどうか、11月や12月に大学内外でどんなイベントがあるのか、試験がいつあるのかなどということが、微信やZoomを利用した交流を通して、直接的にも間接的にも明らかになるのです。この活動の全体会合は基本的に夜の時間帯に行われましたが、夜の全体会合に出席するためにどこからZoomにアクセスしているのかという点についても、生徒一人一人の下校時間や放課後の時間の使い方の様子が垣間見えたと思います。もし現地に実際に赴いて非日常的な空間の中に投げ込まれれば、このような日常的時間の感覚を得ることはなかなか難しかったと思います。

時間と言うことに関していえば、この活動の開催時期が主に11月だったこともあって、お互いの国や学校の11月や12月の行事やイベントもよく話題になりました。私たちの東京大学では11月下旬に駒場祭という学祭があるので、この活動がどんなものであるかについて、新型コロナ感染

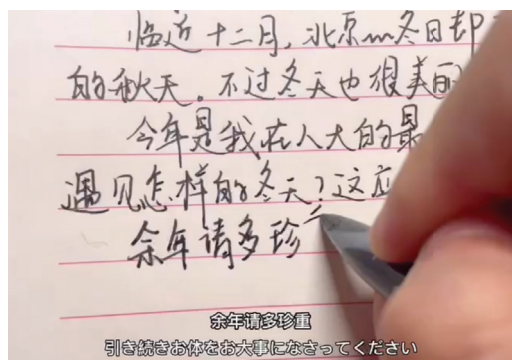
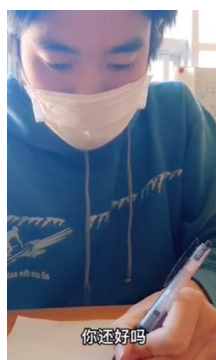
症が猛威をふるう前と後の両方の様子について説明をしました。私の場合、駒場祭の話題について話すと自然と駒場のクラスのことに話題が及びます。東京大学は入学後最初の2年間を専門課程ではなく前期教養課程という場所で過ごし、この2年間は専門が同じ同期ではなく、第二外国語に基づいてクラス分けされた30人ほどの集団と一緒に過ごすことになります。駒場祭の際にはこのクラスの友達と一緒に食べ物の屋台を出す、あるいは演劇を上演するので、私もそれについて紹介しました。人やクラスによって具体的な状況は異なると思いますが、3年生以降別々の専門に進む学生たちがクラスメートとして大学最初の二年間を一緒に過ごすというのは、特別な意味があることだと私は思っています。日本人の他の大学の友達に日本語で話すときもどう話せばよく伝わるかいつも頭を悩ませる話題なので、中国語で行った自分の説明がどのくらい伝わったかは多少自信がない部分もありますが、最低限本人が強調したがつているということは何とか伝わったのではないかと思います。一方で、人民大学には11月に「萌之韻」と呼ばれる、サークルが主体となって出し物を披露するイベントがあることを知りました。コロナ前の東京大学の駒場祭とは異なり食べ物を売るお店はないということでしたが、手品、歌、ダンスなど、いろいろなものを披露していたようです。また、冬至の時期の人民大学では学生と一緒に餃子を作って食べるイベントもあるそうです。私もペアの学生さんもすでに卒業を控えているような学年だったので今でも活動に現役世代として積極的に参加しているわけではなかったのですが、自分が低学年の頃の思い出も交えながら、お互いに紹介しました。

大学レベルだけではなく、国や地域のレベルでも様々な行事や祝日があります。特に話題になったのは11月11日のことです。日本ではおそらくポッキーの日という印象が強く、スーパーなどに行くとポッキーの日を意識したコーナーが設けられているのを目にしますが、中国では「双11」と呼ばれ、独り身を連想させることから独身の日としての認識が強く、自分ためにとりわけオンラインでたくさん買い物をする日でもあるようです。もちろん日本人が11月11日に全員ポッキーを買うわけではないのと同じように、中国

の人が全員この日にオンラインでたくさん買い物をするわけではないのですが、とにかく同じ数字の並びが別のイメージを喚起している点が面白いと感じました。

最後の発表については、相手の学生さんの希望もあって動画の作品を作ろうということになり、私も東京大学の本郷キャンパスを撮影した動画や、原稿を読み上げた録音などを準備しましたが、私の動画制作スキルが低くファイルの変換などについても苦労したので、ペアの学生さんには大変迷惑をかけてしまいました。私個人としては形式よりも内容を重視したかったですし、実際に内容が大事であることは間違いないと思うのですが、他人に見せる作品である以上は見栄えに気を配ることもやはり大事だと思うので、そちらの方面の技術を十分に習得しないまま最終発表の準備に臨んだことは準備不足であったと思いました。卒業前にそのような技術のことも少しは勉強しようと思いました。

新型コロナウイルスの影響のため、今回私たちは残念ながら同じ物理的空間を共有するという経験がほとんどできませんでしたが、その代わりにそれぞれの日常生活の中の時間を共有しました。私はこのような空間よりも時間の共有を重視した国際交流の在り方は新しい可能性を生み出す大変意味深いものであったと思います。結局北京には行けなかったですし、そんなに北京という場所について話したわけでもないの、「深思北京」というよりもむしろ「深思中日大学生生活」といった趣でしたが、そのような形式もとても有意義だと思いました。新型コロナウイルスの影響がなくなった後も、適宜従来の空間を共有することに主眼を置いたプログラムと両立しながら継続していってくれればと思います。最後に、今回の活動を計画・実行して下さった東京大学や人民大学の先生方、一緒に参加してくれた学生たちに改めて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



vlog 作品「冬の手紙」のシーン。岩井映画からインスピレーションを受けた演出。

冬日来信

撰稿：孙文

【引言】

我们一直对不曾了解的、他人的生活抱有一种想象，认为他者的生活应当与自己的想象保持一致，但事实上这种想象与其真实的生活存在着极大的偏差，而当这种想象与其真实的生活交织的时候，就产生了误解与隔阂。因此，减少误解与隔阂的第一步应当是充分的了解，为期三周的东京大学和中国人民大学交流活动便给予了我们这样的一个互相了解的机会。

交流研讨会同时也希望我们共同完成一个课题报告，这个报告应当是我们彼此交流理解后的产物，在初期的交流研讨的过程当中，我和阿部同学试图从中日两地的不同的饮食习惯以及千禧年后影视的不同发展进行探讨分析，但是，对宏观的文化背景的讨论使得我们忽视了具体的人，如此研究下去，我们可以得出他或者她生活在一种什么样的文化氛围之中，但是对于其个人的兴趣、个人的形象却依然不知，更谈不上相交相知。诚然，了解一个人就要去看他所处于一个什么样的文化氛围，但文化对人的影响并不是决定的，过于重视宏观因素对个人的影响反而容易造成对彼此的刻板印象。

在老师的指导下，我们将视角转向了作为个体的人的生活，同期的同学们也有做类似项目的，例如王友莲、刘畅、石川禎子、野中智贵四人的“两京一假日”，陈方媛与松村实纱同学的日常生活分享。因此，既要聚焦于我们的日常，又要和以上同学在形式上有所区别，我们便将目光聚焦到了互送信件的形式上。

相较于现代通讯技术，互送信笺似乎显得有些延迟与老旧，但同时也隐着一种收信的期待，信笺也可以表达较为完整的叙事过程，给我们分享校园的日常生活留下了足够的表达空间。

【方案设计】

初期，我们希望能够列举双方都具有的日常生活进行对比，在对比中发掘差异性和共通性，但是简单的对比分析会让内容变得单调，因此我们决定采用一种互问互答的方式，串联着向对方介绍自己的日常生活。

在内容的取材上，我们选择了“食物”与“社团活动”以及“难忘的经历”等，其间穿插着一些对彼此的问候与自我的感想。在介绍的过程当中，尽量做到避繁就简，对一些事物的介绍点到即止，尽可能地让其成为一种宽松适度的交流，而非详细介绍的报告文章。

在形式上，我们以影像再现信的内容，分别去拍摄了信中所叙述的内容，包括一些校园的风景、社团活动的现场以及众多食物的介绍等。在拍摄的过程当中同时也遇到一些问题，但最后也做了后期处理，包括影片的素材、声音的录制等。

视频总体以我和阿部同学互通信件为主，并分别朗读自己所写的信件，如同两人在面对面对话一般，同时，通过影像呈现信的内容，使得观看者如亲临一般，更能贴近撰写信笺者所要表达的内容与情绪。

初期的设计方案是我和阿部同学各写一封信件，只做一个单调的“寄出——收入”的过程，但为了让视频内容更加丰富，之后又将原有的长信裁剪一半，成为开头和结尾，做成一个“寄出——收入、反馈——收入”结构，使信的表达完成了一次回环，增加了视频的趣味。

【作品：冬日来信】

视频最终成品命名为冬日来信，这并不是什么高超的命名，只是取活动当时的季节与视频的主要内容。视频内容依照上文叙述，分为开头片段——（我）寄出信件——（阿部同学）收到信件、寄出信件——（我）收到信件，写回信。

在开头片段中，我制作了一个简单的海报：



标题正文为汉字，并用日文作为倒影，加入了水纹特效，并在海报的最下方加入两校的logo。

视频开头以天气作为切入，由寒冷的冬日想到滚烫的食物，依次介绍了火锅、水饺、烤红薯三种食物。在阿部同学的回信中则主要介绍了疫情前的锅菜、近期东京大学举办的驹场祭（日本学校所举办的校园祭，与国内社团活动较为类似），并回想之前大一参加学园祭售卖红豆汤的经历。在第二次回信中，我接入阿部同学介绍的驹场祭活动，谈及中国人民大学较为类似的社团表演活动“萌之韵”，并比较了日本的红豆汤与中国的红豆粥的区别。在最后表达了即将毕业的感慨和对未来的期待，收束于对彼此的祝福。

这个视频作品开始于手写信件的镜头，最后也收束于信件的落笔，将视频中间的内容收束于信中文字，从而引发更多的联想与想象。

【结语】

我原先的视频构思是两个人合二为一，构成一种画面的双重性，例如将视频分屏，左边是我在人的生活，右边是阿部同学在东京大学的生活，但最终却不得不放弃。一是由于技术上的差异，我们无法拍摄出满足内容安排的镜头，二是由于沟通上的匮乏，我和阿部同学在短期内无法完成较大工程量的视频拍摄与剪辑。

在本次的交流研讨活动中，我更加深切体会到这样的道理：一个好的创意固然重要，但也同时需要具备实施创意的条件。如前文所讲，一开始的构思由于缺乏拍摄的水平与条件便不得不退求其次，转寻他法。但好在新找到的方法依然提供了一个较为完美的方案。

最后想到了用信件的形式分享日常，其实也是受到了前段时间看的日本电影《情书》的启发，其中两位女主互通书信却从未相见的情节片段令我十分动容，我想，现如今我和阿部同学面临的境地不就是如此么？我们从未相见（线下），只依靠互通信件进行交流，在信中分享自己的喜好与生活，并对对方进行回应。在信与信的传达中我们完成了对彼此的想象，也增进了对双方的了解。

オンライン交流の良さと限界に触れて

私は来年の3月に卒業して東京大学を離れます。そんな私は今までにすでに台湾や大陸などに足を運んで現地の学生と交流をしたこと、さらに数か月単位の留学をしたことがあります。もちろん、大学の中で中華圏から来た学生と対面で交流をする機会も多くありました。しかし、今回のプログラムのように完全にオンラインの形式で今までに出会ったことのない学生たちと3週間のような比較的長いスパンで交流することは初めてだったので、とても新鮮な経験でした。海外渡航をしなくても国際交流ができるのは、専門の勉強がすであって長い時間日本を離れると学業に支障が出るような学年に進んでいる学生にとってはとてもありがたいことです。

今回の交流において一番の成果は、やはり自分とは違う学校に通っている学生が普段どんな生活を送り、どんな将来の計画を持っているかを知ることができた点です。同じ中華圏という意味で、寮の様子などに関しては台北や南京と共通している部分も数多くありましたが、人民大学特有の行事も色々ありましたし、学生たちの考え方や生活様式はそれぞれ人それぞれで、同じ大学の学生同士でも大きな違いがありました。自分とは全く専門の違う学生と親交を持つことができたのも大きな財産です。また、私たちの場合はお互いに学年が高い学生同士のペアだったので、他のグループに比べて今までの大学生活の話をたくさんしたのではないかと思います。この会話を通して、大学で学んだこと、大学で出会った人との人間関係は今の自分を形成する大きな一部分であるということを改めて実感しました。

一方で、オンラインを利用して交流活動を行う際に少し難しいと思ったのは、他のグループの学生と気軽に話すという点です。対面で交流をしていれば、相手の学生グループが話している場所にふらっと足を運び、そのまま話を聞く、あるいは自分も話すということがかなり容易にできますが、オンラインで相手グループの会話に参加するには、相手グループの学生にわざわざZoomのURLなどの情報を要求するということが必要になるので、少し敷居が高かったです。微信の全体グループの中での交流もあったので、その中で発言をする人同士は多少交流ができたと思いますが、それでも対面の水準には到底及ばないと感じました。この点については、自分が解決のためにもっと何か具体的かつ画期的なアクションを企画・実行できたというわけではないので、自分の反省点ということにもなります。

最後になりますが、この活動を実施してくださった先生方、一緒に参加してくれた人民大学や東京大学の学生、そして私がこの活動に参加できるだけの最低限の中国語の実力を授けてくれたという意味で、今まで私と中国語で話してくれたすべての先生や友人に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（阿部祥拓）

望向他者的想象

我是一个重度的二次元爱好者，平时最喜欢的事情就是一边吃饭一边看日漫，并从中获得了无尽的乐趣。对日本动漫大量的涉及让我对这个邻近的国度产生了极大的兴趣，对他们的文化、语言、生活习惯都有深切想要了解的热情。因此，当我听闻有这样的一个活动时，便毅然决然地报名了，并且十分有幸地参与到了其中。

虽是初次在会议中见到阿部同学，但我却有一种莫名熟悉的感觉。在我看来，阿部同学的样貌是那种典型的日漫男主，青春洋溢而不失稳重，眉宇间也有一种英气，并且由于之前去过台湾学习，竟然还能较为流利地说汉语。这毫无疑问令我讶然惊喜了，我在一开始还担心我们之间的语言交流问题。

对于阿部同学我似是有很多要说的，想要和他讨论一些我喜爱的日本动漫情节内容，想要询问他生活在一个被画进动漫的城市里的感受，想要向他分享一个异国之人听到日语歌曲的那种感动。但是我没有说。

我们只是平淡地谈话，分享一些自己生活的日常，例如今日吃了什么东西，日本的红豆汤为什么会加糯米，他对于枣类的排斥，等等等等。好似他与我的生活并无什么大的差别，好似我们相隔不远，只是未曾相见。我原有的对日本的陌生的想象反倒是一种无端的臆想了。

在之后，我们也一起为了完成研讨会交给我们的任务进行合作，并定下了互通信件从而完成视频制作的工作。这个工作并没有像我想象中的那样顺利，此时我感受到了不同国别带来的交流不便的问题，一是拍摄工作，阿部同学和我的拍摄存在着较大的差异，我们彼此想要呈现的内容并没有达成一致，其次是传输问题，虽然我们有着共同的聊天软件平台，但是微信传输的画质实在是令人动容，差到落泪。当我提出发送邮件压缩文件的时候，阿部同学却又似乎不太清楚如何操作，也不太清楚如何将视频转化为压缩文件，这大概与我们日常不同接触有关。总之，我们耗费了很大的心力却只是去完成一个简单的视频传输工作。

但视频完成之后，效果却出乎意料地好，大家似乎都很欣赏这样的表达方式，我转而也就释然了，这毕竟是我与阿部同学共同合作的产物，很难不令我们喜欢，唯一有些问题的是我们在翻译工作上不太精细，存在着语言上的问题。

经历过这次交流会，我并没有在阿部同学身上看到我对于日本的想象，我只是单单地看到了阿部祥拓同学这样一个鲜明的个体，了解他对于温度的喜好，了解他对于大一时期的做红豆汤的怀念，了解他毕业后将要去工作的地方。说起来，我和阿部同学一样，都是今年毕业的学生，对于即将离开的校园，很难不会有所留恋。至于我们彼此的未来，我想，我们应当先把握能把握的当下，那些虚无缥缈的未来事情，就姑且交给未来的我们去烦恼吧。

如我在报告文中所说，我们一直对不曾了解的、他人的生活抱有一种想象，这种想象是与被想象的对象的生活有着很大的差异的。但是我们又能了解谁呢？即便是日日生活的自我，我们也不能说完全的了解，何况偶尔见面的他人，何况从未见面的他者。因此，这样的一种想象是必然的，但也并非全是坏处，现实的我们，或者生活都大概有着各种各样的缺憾，因此对于陌生的他者抱有一种完美的期待，将自我生活的缺憾借由对彼此的想象得以补全，我们就如此在彼此的想象中达到了尽善尽美，想来也是一件十分快乐的事啊。

(孙文)

参加者一覧 * 所属は2021年11月現在

東京大学

阿部 祥拓 (Abe Yoshihiro)	医学部6年
石川 禎子 (Ishikawa Sachiko)	教養学部2年
松村 実紗 (Matsumura Misa)	教養学部2年
森川 力斗 (Morikawa Rikito)	教養部1年
野中 智貴 (Nonaka Tomoki)	教養学部1年
高山 暉啓 (Takayama Akihiro)	経済学部3年

中国人民大学

陈 方媛 (Chen Fangyuan)	社会学院 2021 级本科
刘 畅 (Liu Chang)	文学院 2020 级本科
孙 文 (Sun Wen)	文学院 2018 级本科
于 孙腾 (Yu Sunteng)	哲学院 2019 级本科
王 友莲 (Wang Youlian)	外国语学院 2021 级硕士
赵 黛霖 (Zhao Dailin)	文学院 2020 级硕士
周 诗颖 (Zhou Shiyong)	哲学院 2019 级本科

2021年度北京研修「日中Z世代生活誌」

協力

中国人民大学文学院

指導教員

伊藤徳也 大学院総合文化研究科・教養学部 教授

朱 芸綺 教養教育高度化機構 特任助教

担当

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構 国際連携部門

原 和之 大学院総合文化研究科・教養学部 教授

伊藤徳也 大学院総合文化研究科・教養学部 教授

白 佐立 教養教育高度化機構 特任准教授

朱 芸綺 同 特任助教

青井亭菲 同 事務補佐員

本研修は、株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいで実施されました。

2021 年度北京研修報告集

東京大学&中国人民大学「日中 Z 世代生活誌」

編集 / 装幀 朱芸綺

発行 ゼンショー東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム（LAP）

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL 03-5465-7671

URL : <http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/>

E-mail : admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

